

# 史跡斎宮跡

平成18年度発掘調査概報

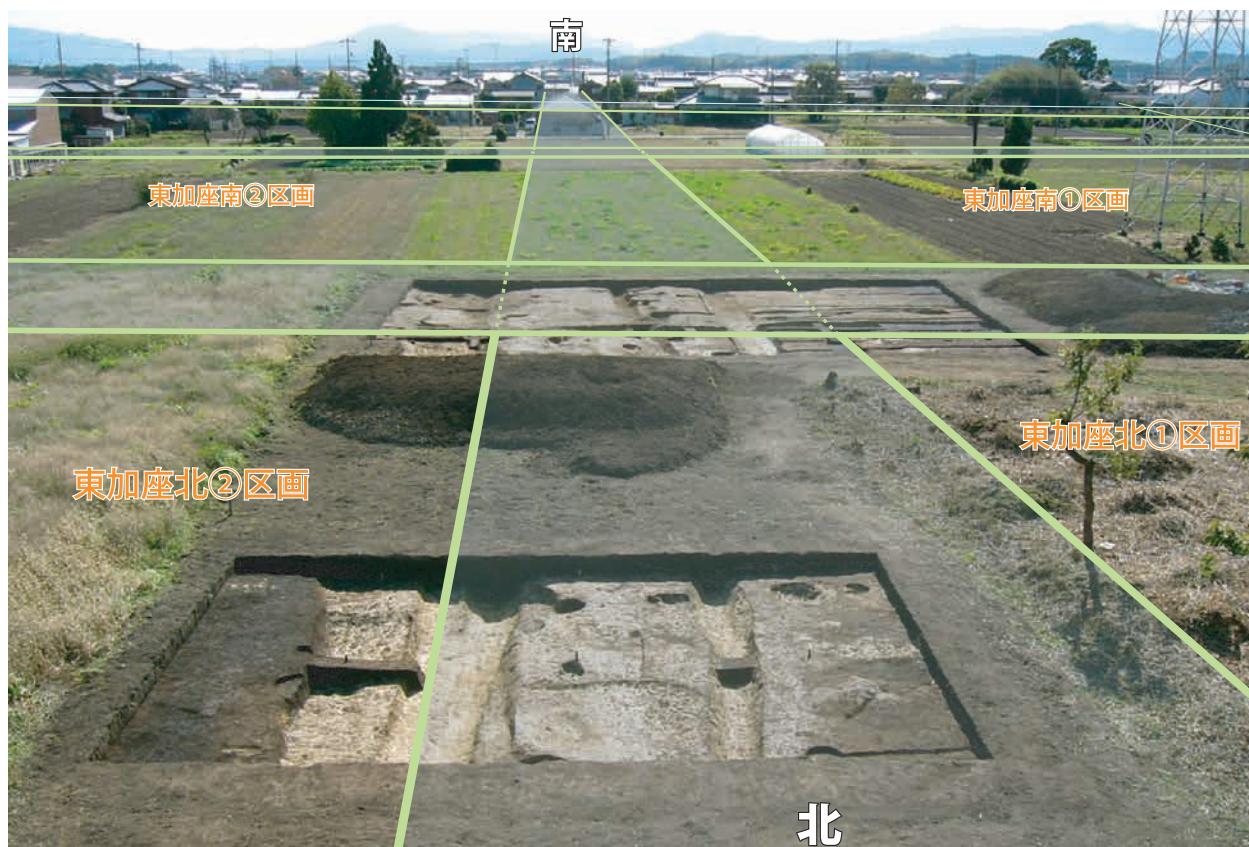
2007年11月

斎宮歴史博物館





第 149 次調査 全景



第 150 次調査 全景



## 序

平成18年度の史跡斎宮跡発掘調査（計画調査）を、史跡西部（第149次調査）と史跡東部（第150次調査）において実施しました。

史跡西部においては、平成14年度から、飛鳥・奈良時代の斎宮の中枢部を確認するための範囲確認調査を線路の北側で実施し、平成17年度からは、線路南側で実施しています。平成18年度の調査地は大型掘立柱塀などを確認した平成17年度の第146次調査の東側にあたります。調査では飛鳥・奈良時代の遺構が調査区西側にしか確認できないことから、当該期の中心部は西側の第146次調査地から北側に広がることが推察されるなど貴重な成果を得ることができました。

一方、平安時代斎宮の中心である史跡東部においては、道路の交差点の状況を明らかにするための第150次調査を実施し、道路側溝の位置などから斎宮が計画的に造営されたことを再確認することができました。

これらの成果を史跡斎宮跡の平成18年度発掘調査概報として、刊行いたしますのでご高覧いただければ幸いです。

最後に、史跡斎宮跡の保存と調査研究・整備にあたっては、地元明和町、関係機関、文化庁及び斎宮跡調査研究指導委員をはじめとする諸先生方からご指導、ご助力をいただき深く感謝申し上げます。また、発掘調査にご配慮・ご協力いただきました国史跡斎宮跡協議会はじめ、地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

2007（平成19）年 11月

斎宮歴史博物館

館 長 花 井 勝

## 例　　言

- 1 本書は、斎宮歴史博物館平成18年度に国庫補助金を受けて実施した史跡斎宮跡発掘調査（第149・150次調査）の概要をまとめたものである。
- 2 明和町が、国庫補助金の交付を受け、調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の第151次調査報告書は、別途明和町が刊行している。
- 3 遺構の実測にあたっては、日本測地系による国土調査法（旧国土座標）の第IV座標系を基準とし、方位は旧国土座標による座標北で示している。
- 4 遺構時期区分の指標となる土器の分類と時期認定については、「斎宮跡の土器」（『斎宮跡発掘調査報告』I 斎宮歴史博物館 2001年）による。
- 5 遺構表示記号は次のとおりである。

S B : 掘立柱建物 S D : 溝 S E : 井戸 S F : 道路 S H : 竪穴住居跡 S K : 土坑  
S X : 土壙墓・墓 S Z : 落ち込み・その他 p i t : 柱穴

- 6 遺物実測図は実物の4分の1を基本とし、資料の性格に応じて変更したものである。遺物写真はとくに指定したもの以外は縮尺不同である。
- 7 出土遺物の色調は、日本色研事業株式会社発行『新版標準土色帖』（2004年度版）に拠る。
- 8 遺物の漢字表現については、材質の差による漢字の偏に必ずしも従うことなく、「わん」は「椀」、「つき」は「杯」を用いている。ただし、参考文献などからの引用の場合にはこの限りではない。
- 9 本書の執筆は、泉雄二・大川勝宏・水橋公恵があたり、目次および文末に記した。編集は調査研究課で行った。また、発掘調査および資料整理については、西村秋子・杉原泰子・小倉靖子・八木光代・水木夏美が補佐した。

# 目 次

I 前言 .....	泉 雄二 .....	1
II 第 149 次調査 .....	水橋公恵 .....	7
III 第 150 次調査 .....	大川勝宏 .....	29

## 挿 図 目 次

第 I - 1 図 史跡斎宮跡位置図 .....	3
第 I - 2 図 平成 18 年度発掘調査区位置図 .....	4
第 I - 3 図 斎宮跡方格地割区画名称 .....	5
第 I - 4 図 史跡斎宮跡における大地区表示 .....	6
第 II - 1 図 第 149 次調査 大地区・グリッド図 .....	7
第 II - 2 図 第 149 次調査 調査区位置図 .....	8
第 II - 3 図 第 149 次調査 土層断面図 (1) .....	9
第 II - 4 図 第 149 次調査 土層断面図 (2) .....	10
第 II - 5 図 第 149 次調査 平面図 (1) .....	10
第 II - 6 図 第 149 次調査 平面図 (2) .....	11
第 II - 7 図 第 149 次調査 平面図 (3) .....	12
第 II - 8 図 第 149 次調査 S X 9591・9594・9600 土層断面図・遺物出土状況図 .....	14
第 II - 9 図 第 149 次調査 S D 9592, S X 9594・S D 9613, S D 9601・S X 9600, S D 9610 土層断面図 および S D 9610 平面図 .....	15
第 II - 10 図 第 149 次調査 出土遺物実測図 .....	17
第 III - 1 図 第 150 次調査 調査区位置図 .....	29
第 III - 2 図 第 150 次調査 平面図 .....	30
第 III - 3 図 第 150 次調査 大地区・グリッド図 .....	31
第 III - 4 図 第 150 次調査 土層断面図 .....	32
第 III - 5 図 第 150 次調査 S D 1940・S D 3705 平面図・ 土層断面図 .....	34
第 III - 6 図 第 150 次調査 S D 1940・S D 1943・S K 9620, S A 9619 平面図・土層断面図 .....	35
第 III - 7 図 第 150 次調査 S D 1935・1936・1940・9615・ S B 9622 平面図 .....	37
第 III - 8 図 第 150 次調査 S B 9622 断面図, S D 1936・1940 土層断面図 .....	38
第 III - 9 図 第 150 次調査 S D 1936 平面図・土層断面図 .....	39
第 III - 10 図 第 150 次調査 出土遺物実測図 (1) .....	42
第 III - 11 図 第 150 次調査 出土遺物実測図 (2) .....	43
第 III - 12 図 第 150 次調査 方格地割道路交差点模式図 .....	48

## 写 真 図 版 目 次

卷頭1	第149次調査区 全景	
卷頭2	第150次調査区 全景	
II-1	第149次調査 遺構(1) .....	22
II-2	第149次調査 遺構(2) .....	23
II-3	第149次調査 遺構(3) .....	24
II-4	第149次調査 遺構(4) .....	25
II-5	第149次調査 遺構(5) .....	26
II-6	第149次調査 遺構(6) .....	27
II-7	第149次調査 遺物 .....	28
III-1	第150次調査 遺構(1) .....	50
III-2	第150次調査 遺構(2) .....	51
III-3	第150次調査 遺構(3) .....	52
III-4	第150次調査 遺構(4) .....	53
III-5	第150次調査 遺構(5) .....	54
III-6	第150次調査 遺構(6) .....	55
III-7	第150次調査 遺物 .....	56

## 表 目 次

第I-1表	平成18年度 発掘調査一覧 .....	2
第II-1表	第149次調査 遺構一覧表 .....	20
第II-2表	第149次調査 掘立柱建物一覧表 .....	20
第II-3表	第149次調査 出土遺物観察表 .....	21
第III-1表	第150次調査 遺構一覧表 .....	41
第III-2表	第150次調査 掘立柱建物一覧表 .....	41
第III-3表	第150次調査 出土遺物観察表(1) .....	44
第III-4表	第150次調査 出土遺物観察表(2) .....	45

# I 前 言

## 1 調査の経緯と概要

史跡斎宮跡は、後に斎宮歴史博物館が建設された古里地区での宅地開発計画に伴い昭和45年に発掘調査が始まり、文化庁の補助事業として昭和48年から開始した範囲確認調査を経て、昭和54年3月27日に国史跡に指定された。県は史跡指定に伴い斎宮跡調査事務所を設置して発掘調査に当たり、平成元年度からは斎宮歴史博物館を建設し、史跡解明のための計画調査を継続して実施している。

斎宮跡の発掘調査は、これまでの調査成果の蓄積から、史跡東部に存在した平安時代の斎宮跡解明が中心となって進められてきたが、史跡西部に所在すると想定されてきた飛鳥・奈良時代の斎宮跡を解明することも重要な課題として残っているほか、鎌倉時代以降の実態についても解明しなければならない課題として残っている。

### 発掘調査

史跡西部での飛鳥・奈良時代の斎宮跡の調査は、対象地域が広いため、効率を考えてトレーニング調査による範囲確認調査を平成14年度から実施しており、平成18年度はその最終年度である。平成17年度に実施した第146次調査は、史跡内で最も標高が高く、立地条件が最も良好な地域で、掘立柱塀や掘立柱建物など初期斎宮に関係した遺構が確認されている。第149次調査は第146次調査区に東接する地域で、第146次調査で確認された初期斎宮の遺構の広がりを確認する目的で調査を実施した。

史跡東部の調査では、平安時代の斎宮寮の中核部である内院地区の可能性が強い牛葉東・鍛冶山西区画の調査、その最北端の寮庫推定区画について、これまでの数次にわたる調査で区画の解明がほぼ終了している。また、史跡東部は道路によって区画されおり、道路側溝の確認により道路幅は約13mであることが確認されている。区画間道路は現在の道路や農道と重なることが多く、道路の復元については部分的な側溝の確認により点と点を繋いで復元する

ことが多く、第120次調査における西加座南区画東北隅の調査例など交差点の確認例は少ない。このため、第150次調査は東加座北①区画東南部に調査区を設定して、交差点における道路側溝の在り方を確認する目的で調査を実施した。

### 整備

史跡整備事業は平成15年度から中断している。平成17年度に史跡内に土地を所有する住民で構成される国史跡斎宮跡協議会から県教育委員会教育長に斎宮跡の整備について強い要望が上げられたことから、平成18年度に、史跡東部を中心とした今後の整備についての検討を行なうことになった。

検討会は学識経験者・地元住民等8名の委員で構成され、7月7日(金)、9月19日(火)、1月30日(火)の3回検討会を開催し、平成19年度以降の史跡東部を中心とした整備の方向性をまとめた。史跡東部の整備については、柳原区画が対象地となったが発掘調査が進展していないことから、平成19年度～21年度に発掘調査を集中的に行い、その調査成果を受けて、整備内容を検討することになった。

## 2 調査体制

史跡斎宮跡の調査・整備に関する業務は、斎宮歴史博物館調査研究課が担当した。当報告に関わる組織は以下の体制で行った。

### 平成18年度

泉 雄二（主幹兼課長）  
大川勝宏（主査）  
水橋公恵（技師）

### 平成19年度

倉田直純（専門監兼課長）  
泉 雄二（主幹）  
大川勝宏（主幹）  
水橋公恵（技師）

### 3 調査研究指導委員会議

斎宮跡の調査・整備について指導・助言を得るため、斎宮跡調査研究指導委員会議を実施している。平成18年度は、平成18年10月25日（水）に開催し、第149・150次調査と今後の整備について指導を得た。指導委員の方々は下記のとおりである（順不同・敬称略）。

上村喜久子（元名古屋短期大学教授）

北原理雄（千葉大学教授）

佐々木恵介（聖心女子大学教授）

鈴木嘉吉（元奈良国立文化財研究所長）

所 京子（岐阜聖徳学園大学名誉教授）

八賀 晋（三重大学名誉教授）

町田 章（前独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所長）

渡辺 寛（皇學館大学教授）

金田章裕（京都大学教授）

増渕 徹（京都橘女子大学教授）

### 4 体験発掘

毎年実施している体験発掘は、小学校高学年および中学生を対象とした当館の体験事業で一般公募により28名の参加を得て実施した。8月29日（火）・30日（水）に第149次調査現場の発掘調査の実地体験や斎宮についての室内講義、土器の洗浄体験・接合体験などを行った。

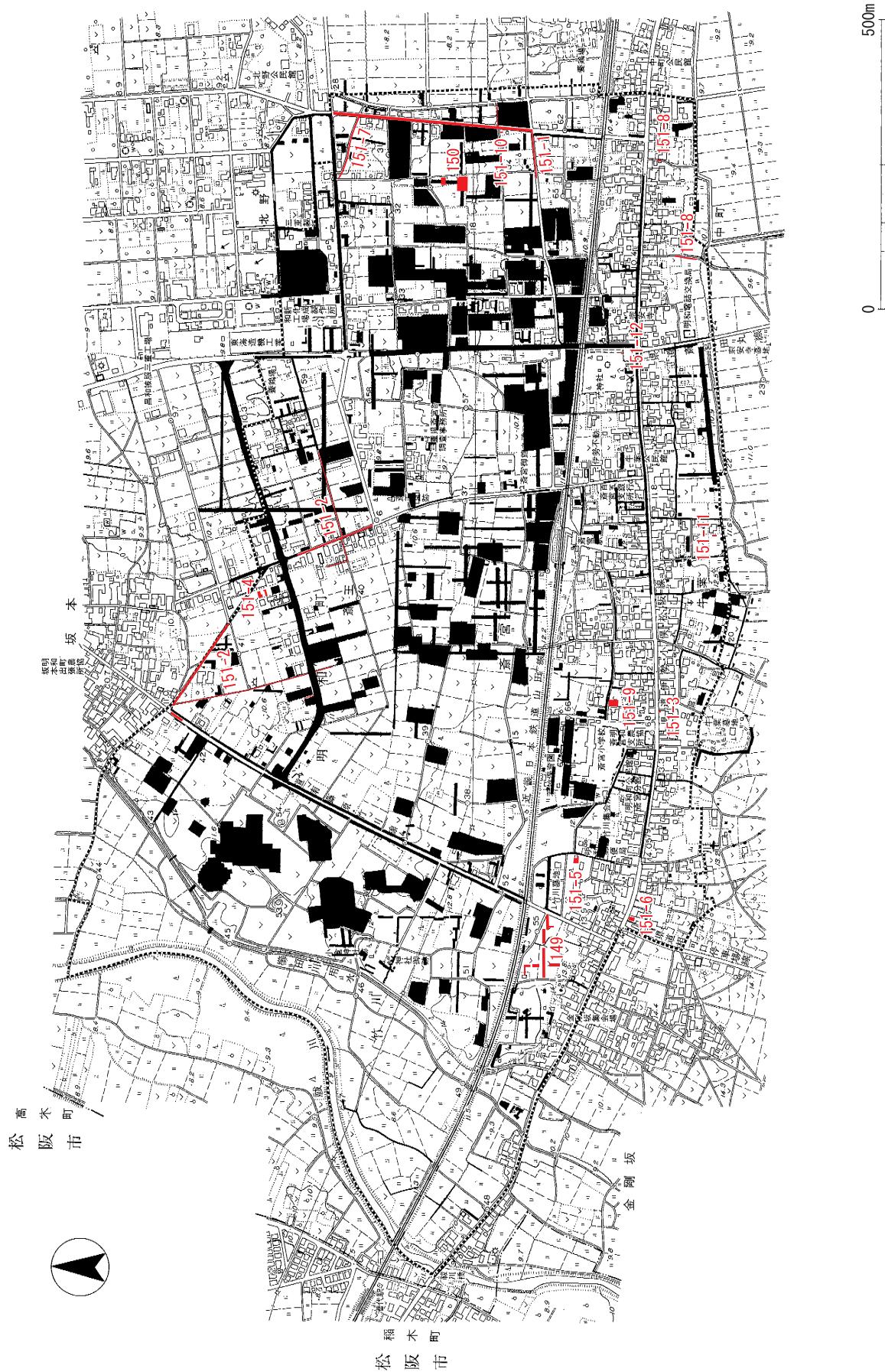
（泉 雄二）

第I-1表 平成18年度発掘調査一覧

調査次数	地 区	面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	位 置	土地 所有者	現状変更名	保存地 区区分
149	G11・H11	650.0	18.8.16～11.15	明和町竹川字中垣内	個人	計画発掘調査	3
150	U9・10	500.0	18.10.16～19.1.10	明和町斎宮 2442ほか	明和町	計画発掘調査	1
151-1	V8～11	176.8	18.8.7～12.1	明和町斎宮	明和町	下水道管敷設	2
151-2	L5・6 M6・7 O7・8 P7	465.0	18.8.29～10.16	明和町斎宮	明和町	下水道管敷設	3
151-3	L13	4.0	18.8.18	明和町斎宮	個人	個人住宅改築	4
151-4	N6	92.3	18.9.11～9.29、12.25	明和町斎宮	個人	個人住宅新築	3
151-5	I12	56.7	18.9.27	明和町竹川	個人	個人住宅改築	4
151-6	H12・13	65.0	18.10.11～10.23	明和町竹川	個人	個人住宅改築	4
151-7	V7・8	193.0	18.11.24～19.1.19	明和町斎宮	明和町	下水道管敷設	3
151-8	T13・V13	11.5	18.11.8、12.24	明和町斎宮	明和町	上水道管改修	3
151-9	L12	4.2	18.11.27	明和町斎宮	個人	植栽撤去・抜根	3
151-10	V10	8.0	18.12.18～12.19	明和町斎宮	個人	飼料タンクの設置	2
151-11	O14	92.0	19.1.31～2.7	明和町斎宮	個人	宅地造成	3
151-12	R12	1.5	19.3.23	明和町斎宮	個人	ポール設置	4



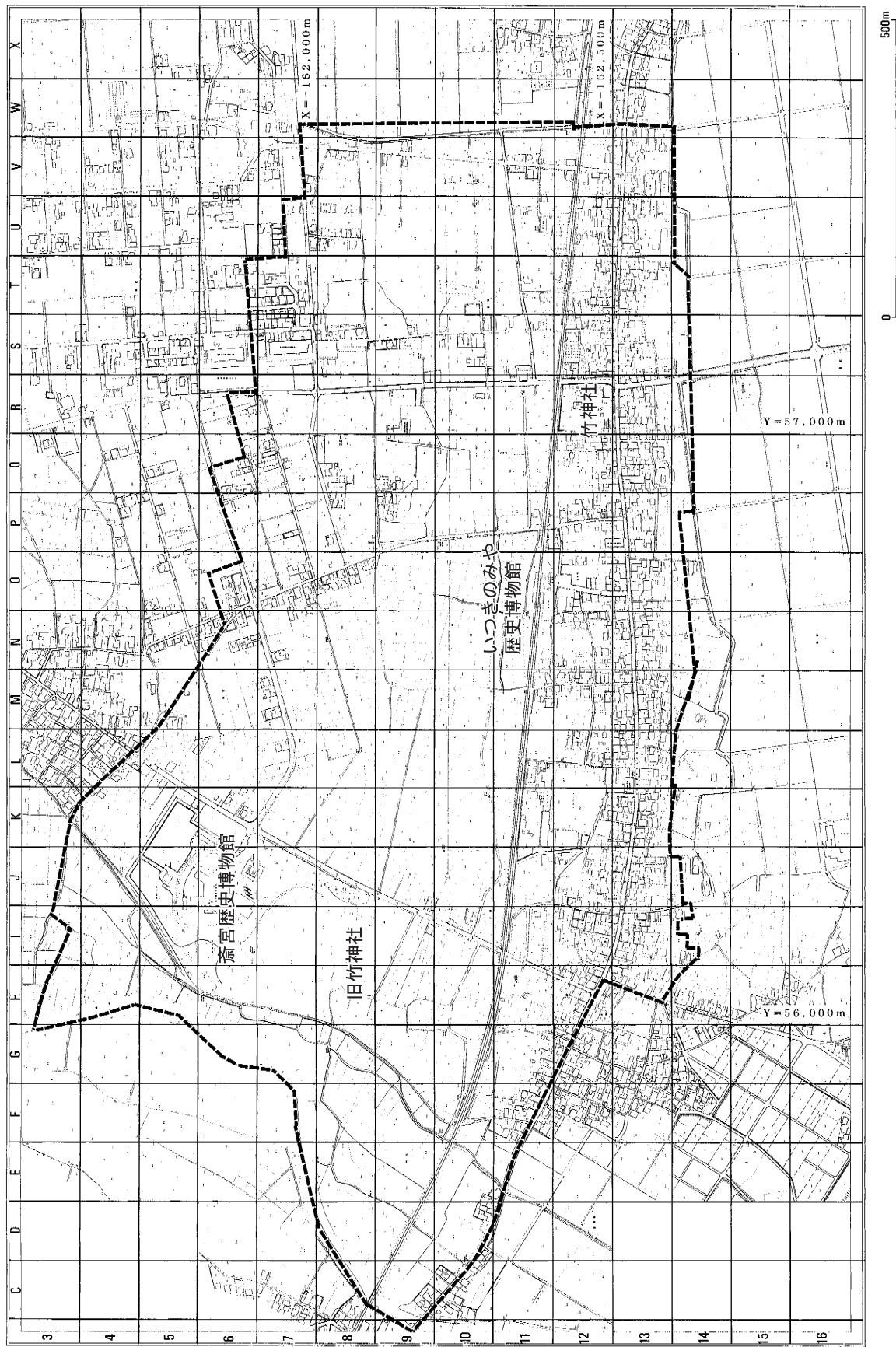
第I-1図 史跡斎宮跡位置図（1：50,000）国土地理院発行1/25,000「松阪」「明野」（平成4年）より



第I-2図 平成18年度発掘調査区位置図（1：10,000）



第I-3図 斎宮跡方格地割区画名称 (1:5,000)



第I-4図 史跡斎宮跡における大地区表示（2002年）

※太破線内が国史跡範囲。座標は日本測地系（旧国土座標第VI系）による

## II 第149次調査 (6AG11・H11 中垣内地区)

### 1 調査の契機と経過

平成18年度第1回目の計画調査として実施した第149次調査では、史跡指定地西部の大字竹川字中垣内地内の台地上を調査対象とした。調査地は斎宮歴史博物館から南へ約550m、近鉄山田線のすぐ南に位置しており、地目は畠地である。

斎宮歴史博物館では、飛鳥・奈良時代の斎宮（以下、初期斎宮と呼ぶ）の遺構検出を目指して、平成14年度から史跡西部で確認調査を行っており、平成18年度で5年目になる。近鉄線の北側を対象に行つた3年間の調査では、奈良時代の道路側溝（第141次調査）、柵（第144次調査）などが確認され、近鉄線の南側を対象に行つた第146次調査では、内院の塀に次ぐ規模の掘立柱塀が検出され注目を浴びた。

今回の調査区付近は、史跡内で最も標高の高い地点から約100～200mしか離れていないが、1mほど

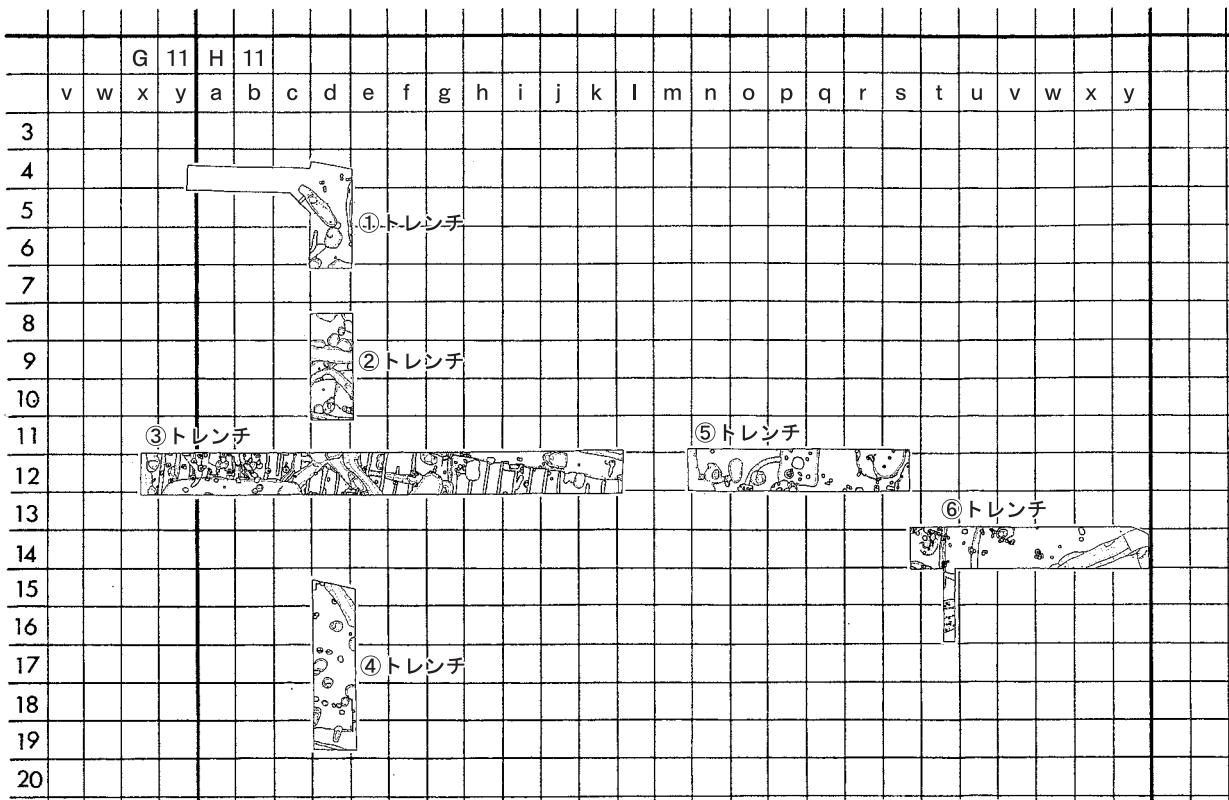
低くなっている、標高は13.5m前後である。

現地調査は、平成18年8月16日に開始し、同年11月15日に終了した。最終的な調査面積は650m<sup>2</sup>である。調査期間中、8月29・30日に「夏休みこども斎宮跡体験発掘教室」（参加者25名）を、10月28日に現地説明会（参加者85名）を開催した。

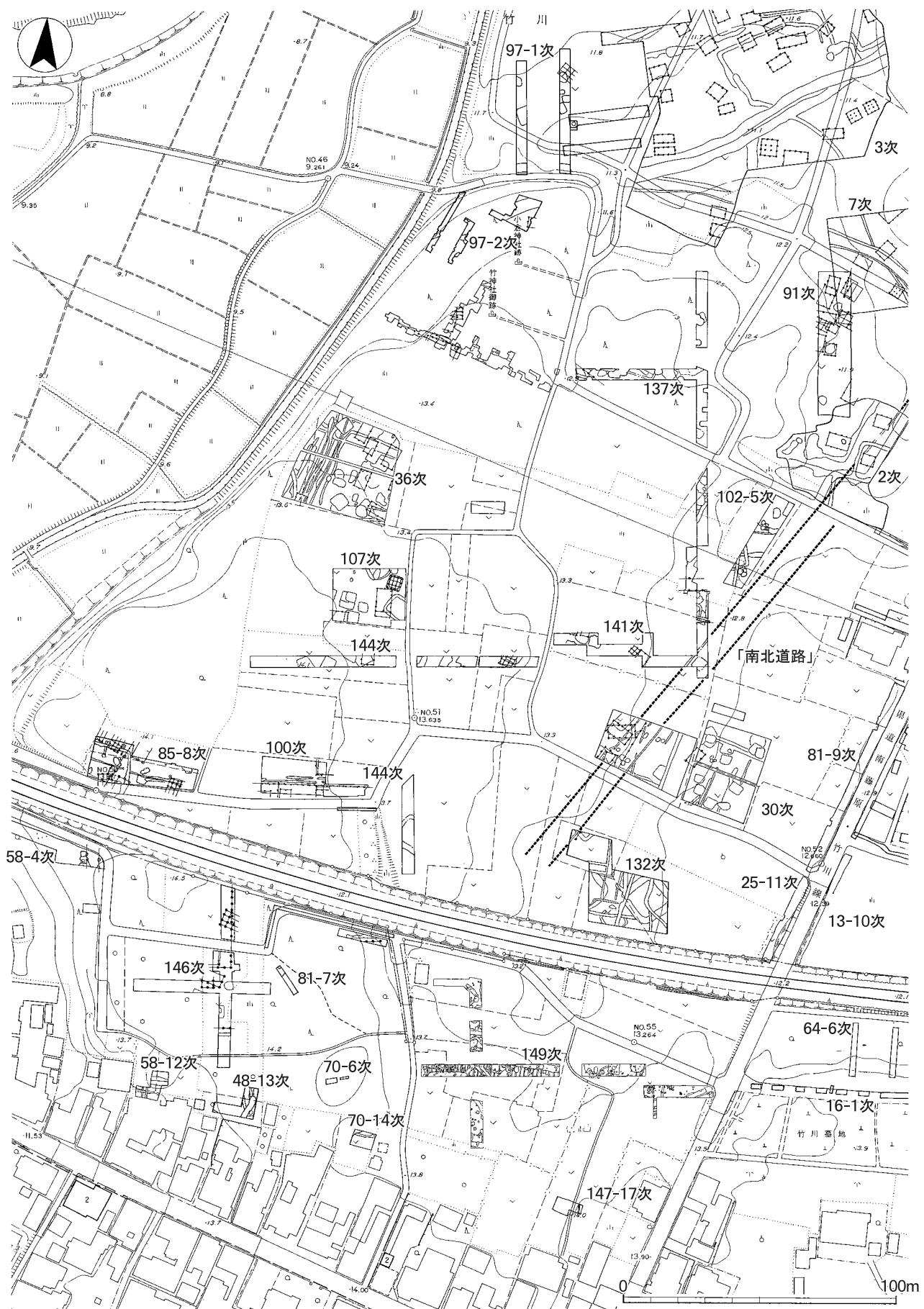
### 2 調査区の基本層序

基本的な層序は、上から表土・耕作土（厚さ20～30cm程）、黒褐色土層（20～30cm程）、黄褐色土層である。調査区の中央付近（③トレンチ東半～⑤トレンチ西半、④トレンチ）には黒褐色土層が比較的良好に残存していたが、調査区の北側にはまったく認められなかった。

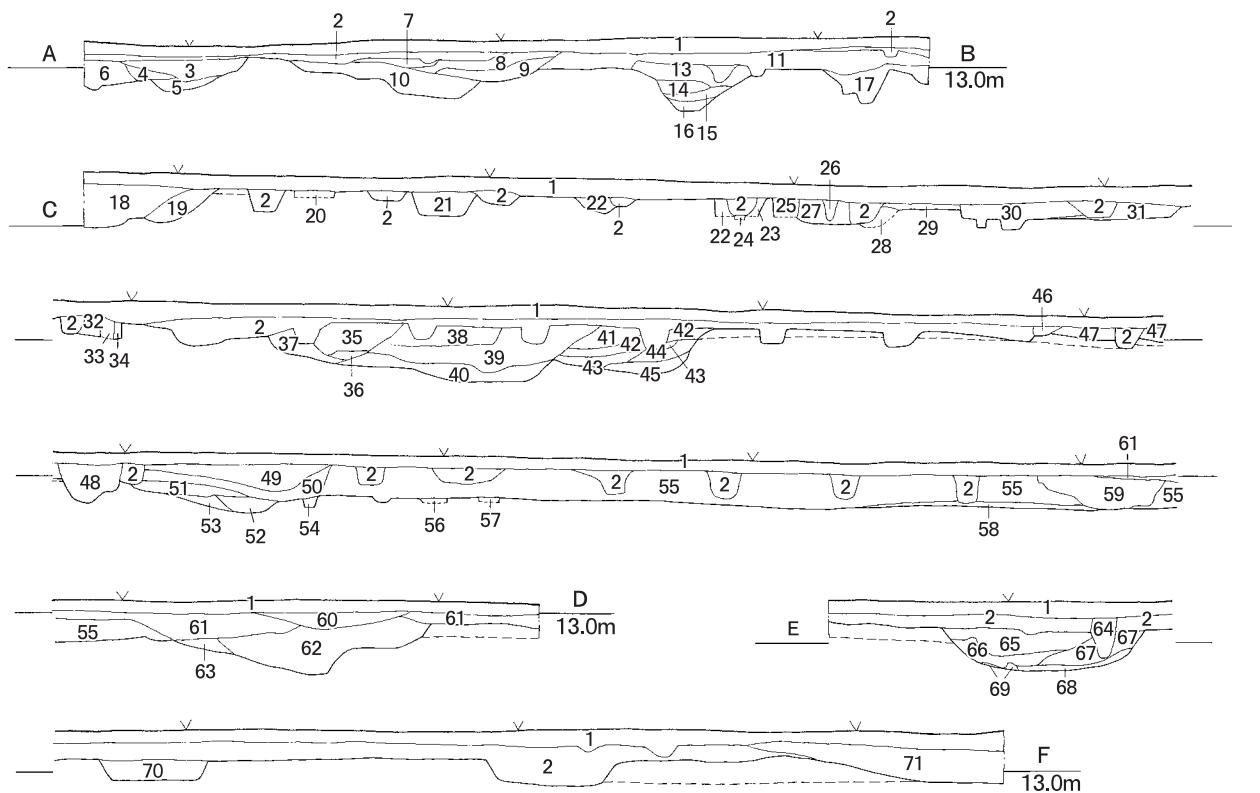
遺構検出は、基本的に表土除去後黒褐色土上面で行ったが、遺構埋土との識別は容易ではなく、場所によっては、正確な遺構の形状を捉るために黄褐



第II-1図 第149次調査 大地区・グリッド図 (1:800)

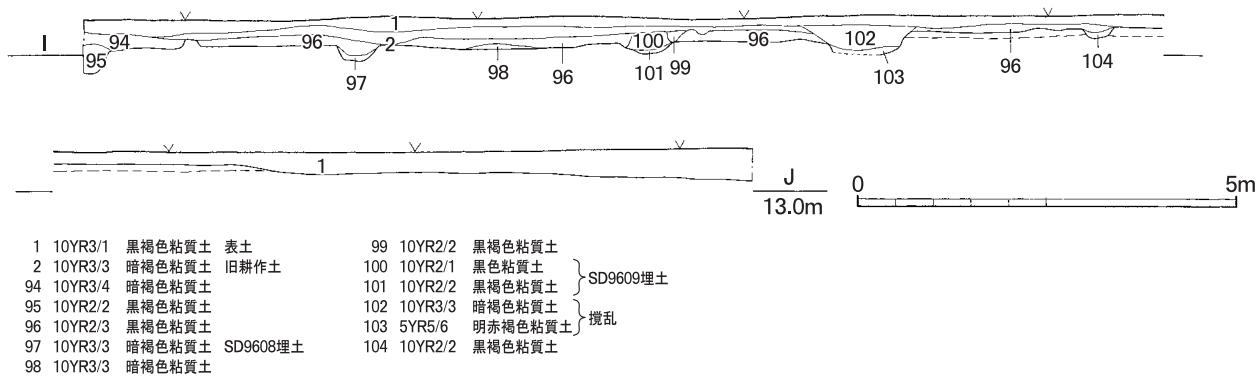


第II-2図 第149次調査 調査区位置図 (1 : 2,000)

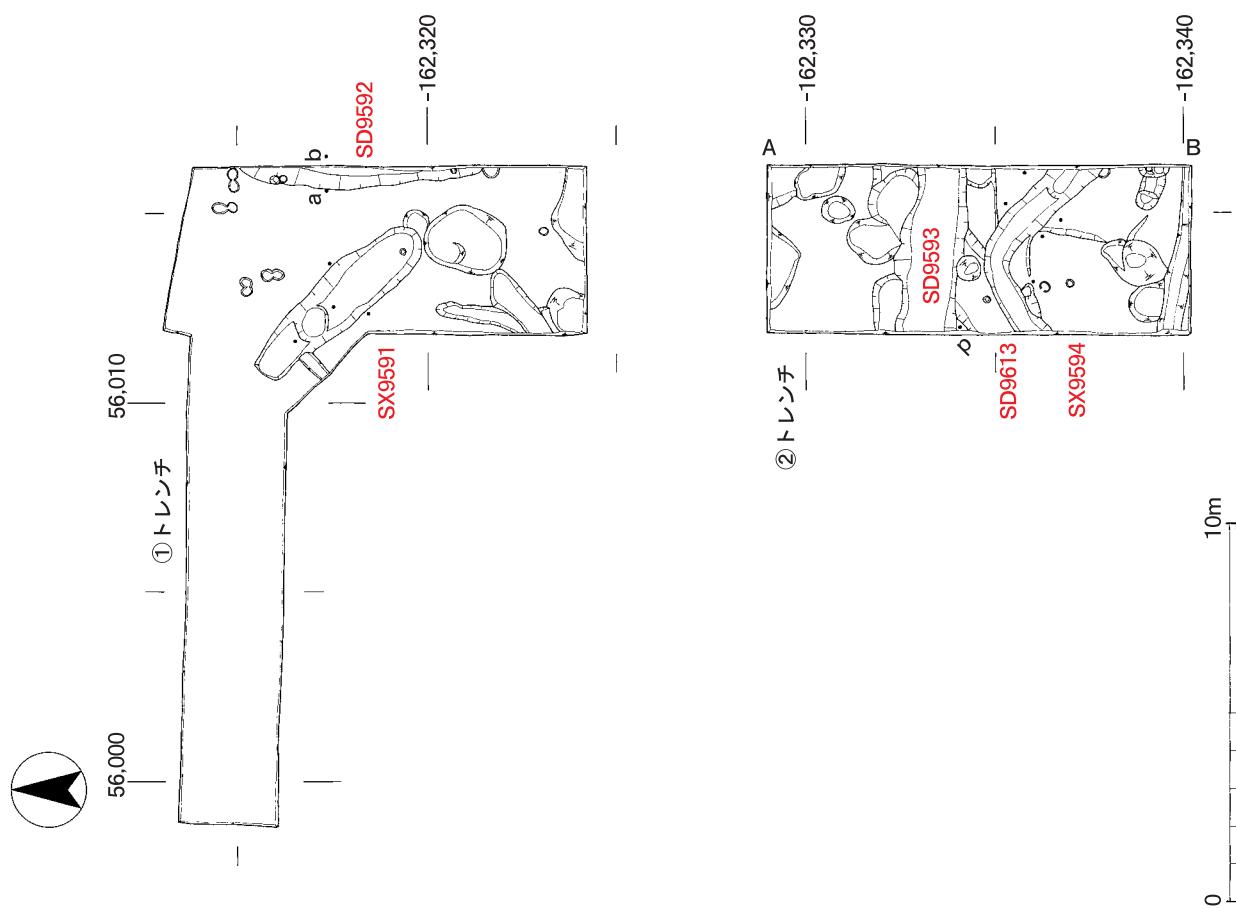


1 10YR3/2 黒褐色粘質土 表土・耕作土	32 10YR2/2 黒褐色粘質土	63 10YR3/4 暗褐色粘質土
2 10YR3/2 黒褐色粘質土 旧耕作土・耕作溝	33 10YR2/3 黒褐色粘質土	64 10YR2/3 黒褐色粘質土 根搅乱しまり悪
3 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	34 10YR3/2 黒褐色粘質土 =2	65 10YR2/1 黒色粘質土 (66よりやや淡)
地山粒～φ3cmまだら混	35 10YR2/2 黒褐色粘質土	66 10YR2/1 黒色粘質土 67よりやや淡
4 10YR3/1 黒褐色粘質土	36 10YR2/1 黒色粘質土	67 10YR2/1 黒色粘質土
5 10YR3/2 黒褐色粘質土	37 10YR2/3 黒褐色粘質土 地山細粒多含	68 10YR2/2 黒褐色粘質土
6 10YR2/1 黑色粘質土	38 10YR2/2 黒褐色粘質土 }	69 10YR2/3 黒褐色粘質土
7 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	39 10YR2/1 黑色粘質土 SX9600埋土	70 10YR2/1 黑色粘質土
8 10YR3/2 黒褐色粘質土	40 10YR2/3 黑褐色粘質土 }	71 10YR2/3 黑褐色粘質土 しまり悪
9 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土	41 10YR2/2 黑褐色粘質土 }	72 10YR2/2 黑褐色粘質土
10 10YR2/3 黒褐色粘質土 SD9593埋土	42 10YR2/3 黑褐色粘質土 }	73 10YR3/3 暗褐色粘質土 =2 地山混成土
11 10YR2/3 黒褐色粘質土	43 10YR2/2 黑褐色粘質土 }	74 10YR2/3 黑褐色粘質土
12 10YR2/2.5 黑褐色粘質土	44 10YR2/2 黑褐色粘質土 }	75 10YR3/3 暗褐色粘質土
13 10YR2/2 黑褐色粘質土	45 10YR2/3 黑褐色粘質土 地山細粒多含	76 10YR2/2 黑褐色粘質土 }
14 10YR2/2 黑褐色粘質土 やや淡い	46 10YR3/4 暗褐色粘質土 }	77 10YR2/2 黑褐色粘質土 }
15 10YR2/3 黑褐色粘質土 地山粒やや混	47 10YR3/3 暗褐色粘質土 =2	78 10YR2/1 黑色粘質土 SH9606埋土
16 10YR2/2 黑褐色粘質土 と7.5YR6/8の混成土	48 10YR3/4 暗褐色粘質土 }	79 10YR2/1 黑色粘質土
17 10YR2/3 黑褐色粘質土 11層より暗	49 10YR3/4 暗褐色粘質土 }	80 10YR2/3 黑褐色粘質土 =2 地山混成土
18 10YR2/3 黑褐色粘質土 しまり悪	50 10YR2/3 黑褐色粘質土 亂	81 10YR4/6 黑褐色粘質土
19 10YR2/2 黑褐色粘質土 =2	51 10YR2/2 黑褐色粘質土 }	82 10YR2/2 黑褐色粘質土
20 10YR2/2 黑褐色粘質土	52 10YR2/1 黑色粘質土 }	83 10YR2/3 黑褐色粘質土
21 10YR2/2 黑褐色粘質土	53 10YR3/3 暗褐色粘質土 還構か？	84 10YR3/4 暗褐色粘質土
22 10YR2/2 黑褐色粘質土	54 10YR3/3 暗褐色粘質土 根搅乱しまりなし	85 10YR2/2 黑褐色粘質土
23 10YR2/2 黑褐色粘質土 地山粒多含	55 10YR2/2 黑褐色粘質土	86 10YR2/3 黑褐色粘質土
24 10YR2/2 黑褐色粘質土	56 10YR2/1 黑色粘質土	87 10YR2/2 黑褐色粘質土
25 10YR2/2 黑褐色粘質土 地山粒多含	57 10YR2/1 黑色粘質土	88 10YR2/1 黑色粘質土
26 10YR2/3 黑褐色粘質土	58 10YR2/2 黑褐色粘質土	89 10YR2/2 黑褐色粘質土
27 10YR2/2 黑褐色粘質土	非常にしまり良い。上に白色土まだらに入る	90 10YR2/3 黑褐色粘質土 地山粒含
28 10YR2/2 黑褐色粘質土	59 10YR3/4 暗褐色粘質土	91 10YR2/1 黑色粘質土 やや黒い
29 10YR2/3 黑褐色粘質土	60 10YR2/3 黑褐色粘質土	92 10YR3/3 暗褐色粘質土 地山粒多含
30 10YR3/3 暗褐色粘質土	61 10YR2/3 黑褐色粘質土 48よりやや暗い	93 10YR3/4 暗褐色粘質土 地山粒多含
31 10YR4/6 褐色粘質土	62 10YR2/2 黑褐色粘質土 下部に礫多含	

第II-3図 第149次調査 土層断面図(1) (1:100)



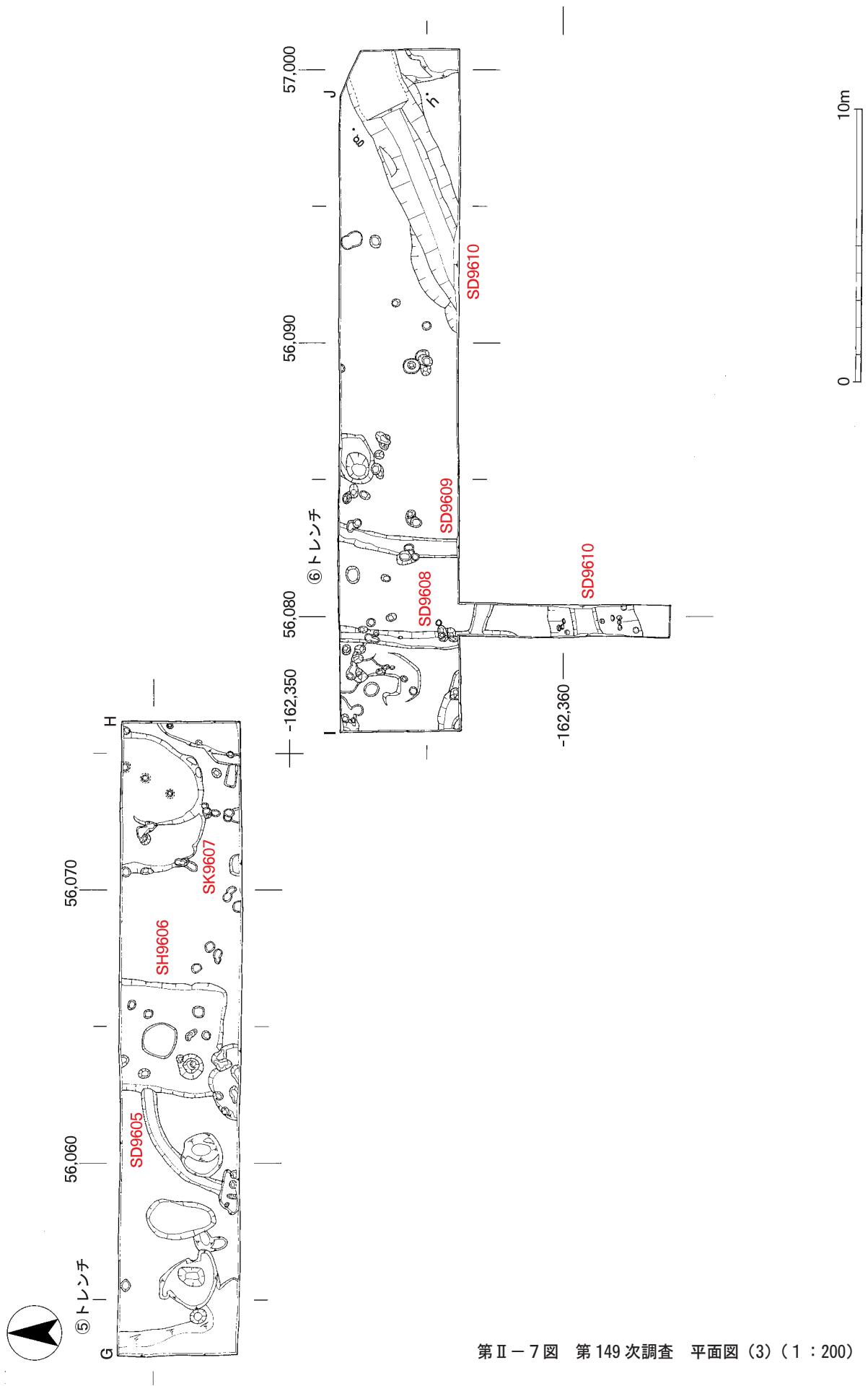
第II-4図 第149次調査 土層断面図(2) (1:100)



第II-5図 第149次調査 平面図(1) (1:200)



第II-6図 第149次調査 平面図(2)(1:200)



第II-7図 第149次調査 平面図(3)(1:200)

色土層上面まで掘り下げるをえなかつた。

なお、遺構埋土の掘り下げに際しては、まず黒褐色土層上面で検出した遺構らしきものの輪郭に沿って、黒褐色土層の厚さだけ掘削し、残余については黄褐色土上面で正確な遺構形状を把握してから掘り下げるのこととした。

### 3 遺構

調査の結果、弥生時代の方形周溝墓、古代の竪穴住居・掘立柱建物・土坑、中世の溝、時期不明の溝などが検出された。そのほかにも、多数の小土坑（ピット）が認められるが、調査区が狭隘であることもあり、現時点では建物・塀・柵などの柱穴かどうかの判断は難しい。

以下、主な遺構について記述する。

#### (1) 弥生時代後期

この時期の主な遺構としては、方形周溝墓4基が挙げられる。いずれも後世の削平を受けており、墳丘部分は残っていない。

**S X 9591** ①トレンチH11区d 5・6 グリッドで確認された方形周溝墓。西半は調査区外に及んでおり、今回検出できたのは東半のみであるが、一辺の長さ8m程度の平面正方形を呈すると考えられる。周溝の北隅は、明確に切れて陸橋状になっており、撓乱を受けている東隅も、同じく陸橋状になっていることが判る。周溝の規模は、北東溝で最大幅1.5m、検出面からの深さは北端付近で約0.2m、中央やや北寄りで一段深くなり0.4～0.5m、南東溝は幅0.9m、検出面からの深さ約0.1mである。方位は、北溝でN-41°-W。埋土は、基本的に黒色土と黒褐色土の互層で、自然堆積土と考えられるが、土層観察を行った地点では流れ込む方向に偏りは認められなかった。

遺物としては、北東溝の一段下がった溝底付近で弥生土器の壺が出土した。

**S X 9594** ②トレンチH11区d 9・10グリッドで確認された直角に屈曲する溝。方形周溝墓の北隅部分とみられるが、②トレンチの4m南に東西方向に設定した③トレンチからは検出されていないことから、周溝を含む平面規模は一辺8m以下と考えられる。溝の幅は、検出面で約1.0m、底面で約0.4mである。断面は逆台形を呈しており、屈曲部分も特に浅くは

なっていない。方位は、東溝でN-42°-W。埋土は、基本的に黒色土と黒褐色土の互層で、自然堆積土と考えられる。周溝で囲まれた内側から土が流れ込んだ状況が観察されることから、盛土された墳丘を想定できる。

遺物としては、東溝の一段下がった溝底付近で弥生土器壺が出土した。

**S X 9600** ③トレンチH11区c 12・d 12・e 12グリッドで確認された直角に屈曲する溝。S X 9594と同様に方形周溝墓の北隅部分とみられるが、検出場所の8m南に離れて設定した④トレンチからは検出されていないことから、周溝を含む平面規模は一辺9m以下と考えられる。検出面での周溝の幅は、西側溝の最も広い部分で1.6m、底面で約0.9mで、断面はU字形に近い逆台形を呈する。方位は西溝でN-47°-E。埋土は、基本的に黒色土と黒褐色土の互層で、自然堆積土と考えられる。

遺物としては、東北溝の一段下がった溝底付近で弥生土器壺1個体が倒立状態で出土したほか、周溝埋土の上層からいわゆる「山茶碗」など後世の陶器や土器が出土した。

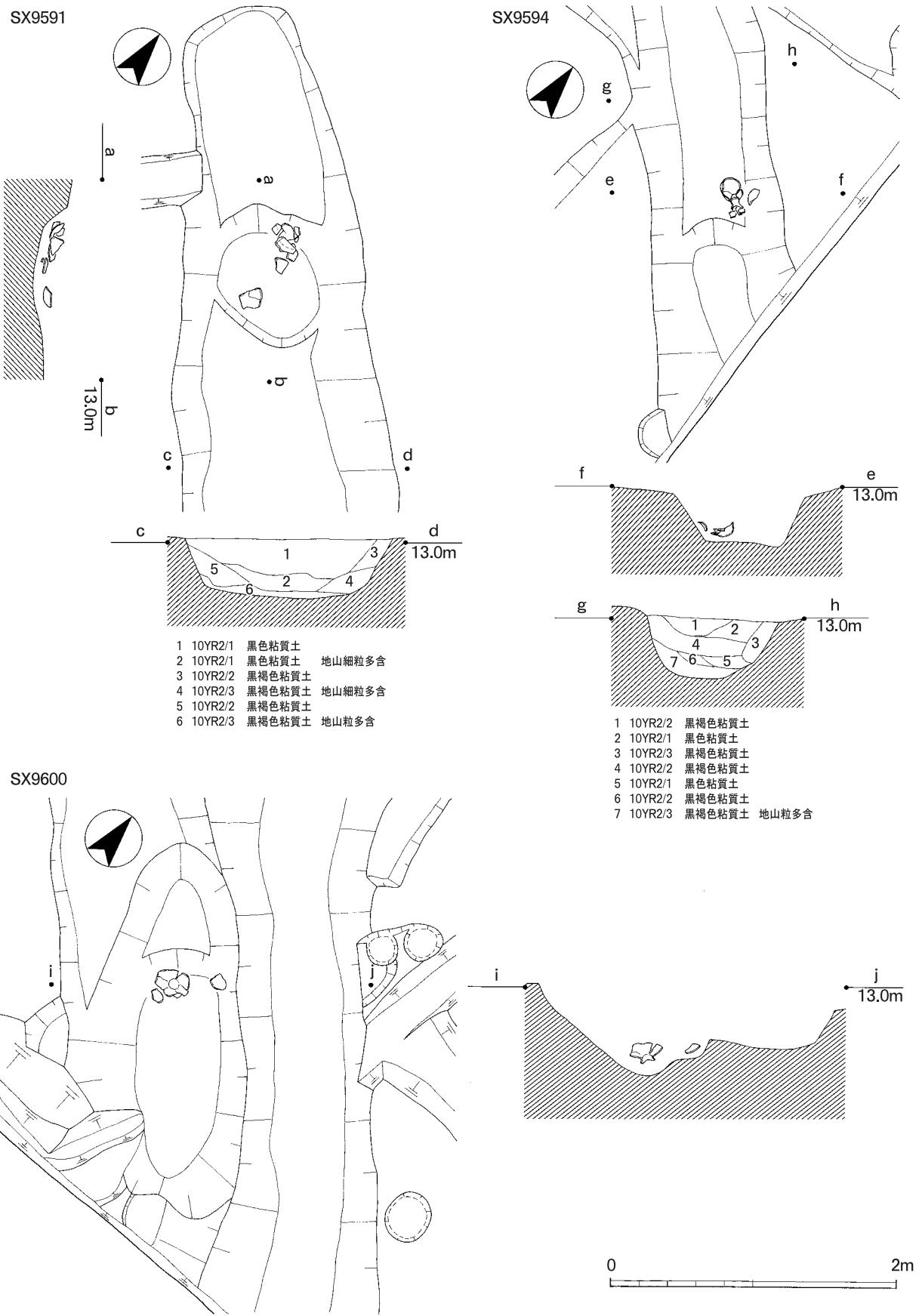
**S X 9603** ④トレンチH11区d 15・16 グリッドで確認された溝。調査区北壁付近が屈曲部分と考えられたため、方形周溝墓の南西辺と判断した。周溝の検出面での最大幅は1.4mで、底面幅は約0.8m。検出面からの深さは約0.4mで、断面は逆台形を呈する。南西溝の方位は、N-33°-W。埋土は、基本的に黒色土と黒褐色土の互層で、自然堆積土と考えられる。

遺物としては、弥生土器が出土した。

#### (2) 古代

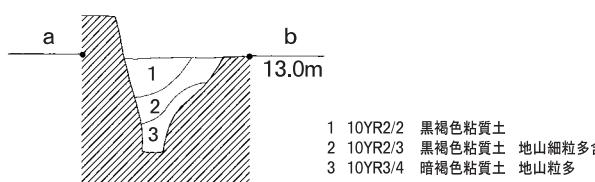
この時期の主な遺構としては、掘立柱建物2棟・竪穴住居1棟・土坑2基・溝1条が挙げられる。掘立柱建物2棟が重複して検出された③トレンチ西端付近には、柱穴状の小土坑（ピット）が集中しており、少なくともあと1・2棟の建物は存在したと思われるが、調査区が狭いため、現時点では建物として間取りを復元するに至っていない。

**S B 9611** ③トレンチ西端のH11区a 12・b 12・c 12グリッドで検出された側柱の掘立柱建物。東西3間×南北1間以上で、主軸方位はN-1°-W。柱掘形は一辺0.5～0.6mの略方形を呈し、柱痕跡は直径20cm

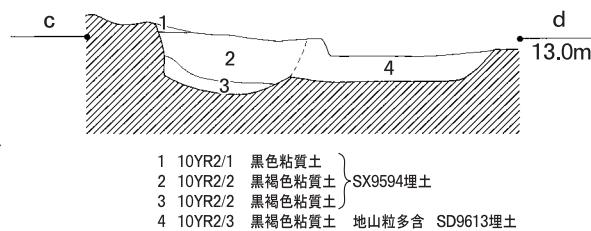


第II-8図 第149次調査 SX 9591・9594・9600 土層断面図・遺物出土状況図 (1:40)

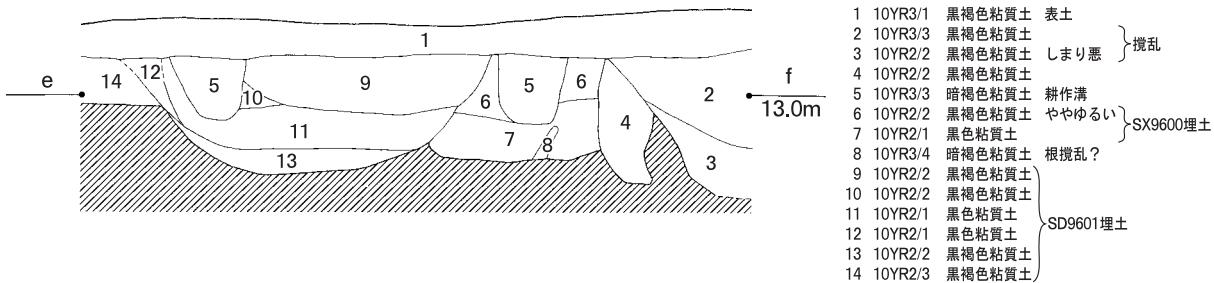
SD9592



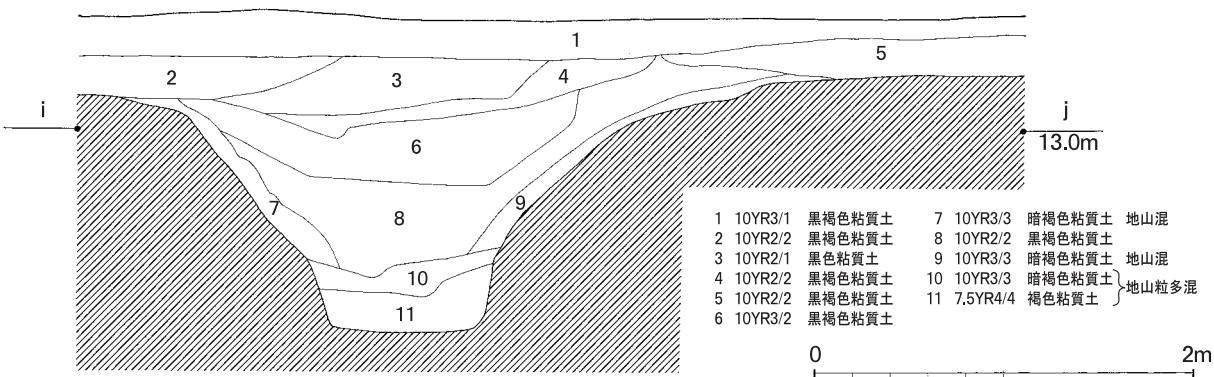
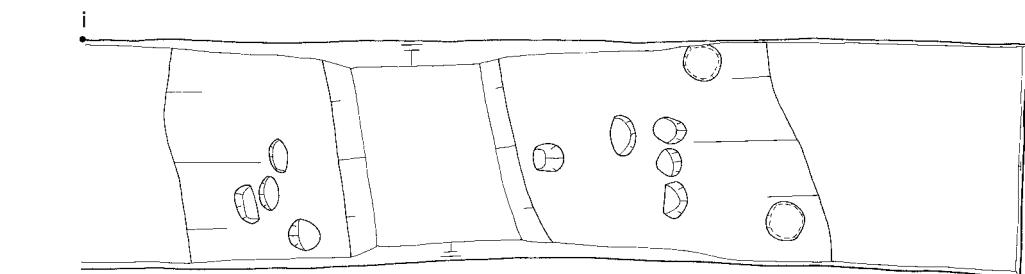
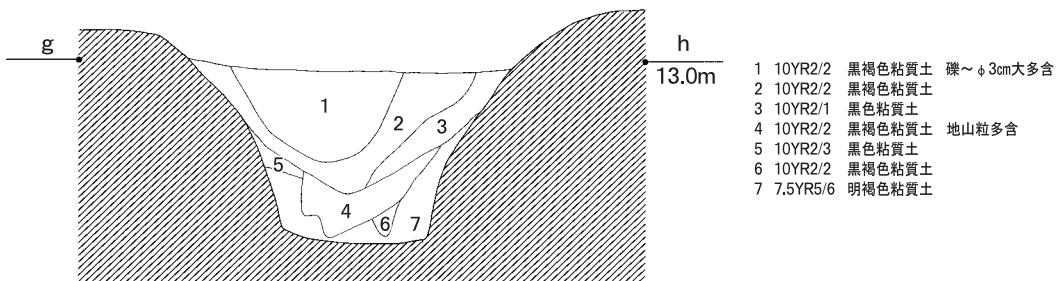
SX9594・SD9613



SD9601・SX9600



SD9610



第II-9図 第149次調査 SD 9592, SX 9594・SD 9613, SD 9601・SX 9600, SD 9610 土層断面図およびSD 9610 平面図 (1:40)

前後、柱間は1.9～2.2mである。

遺物としては、土師器が出土した。

**S B 9612** ③トレンチ西端のG11区y12・H11区a12・b12グリッドで検出された側柱の掘立柱建物。東西3間×南北1間以上で、主軸方位はN-3°-E。柱掘形は一辺0.4～0.6mの略方形を呈し、柱痕跡は直径20cm前後、柱間は1.8～2.4mである。

遺物としては、土師器の小片が出土した。

**S H 9606** ⑤トレンチ中央東寄りのH11区p12・q12グリッドで検出された竪穴住居。北辺が調査区外になるため全容は不明だが、東西約4.0m×南北4.0m以上の規模を有しており、平面形態は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは0.2m。東辺の方位はN-4°-Eである。竈は原形をとどめていなかったが、東壁中央付近に焼土の集中が認められた。

遺物としては、土師器（杯G・長胴甕）・須恵器がコンテナケース1／2箱分ほど出土した。

**S K 9604** ④トレンチ南壁のH11区d19グリッドで検出された土坑。長辺1.7m×短辺0.8mの長楕円形を呈し、検出面からの深さは約1.0mである。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物としては、土師器・須恵器・鉄滓などが出土した。

**S K 9607** ⑤トレンチ東寄りのH11区r12・s12グリッドで検出された土坑。北側が調査区外になるが、平面形状は直径5.2mの略円形を呈すると考えられる。検出面からの深さは約0.3mで、埋土は黒色土もしくは黒褐色土。

遺物としては、弥生土器・土師器杯・須恵器壺などがコンテナケース2／3箱分ほど出土した。

**S D 9592** ①トレンチ東壁際のH11区d5グリッドで検出された遺構。東側が調査区外になるため全容は不明。溝としたが、竪穴住居であるかもしれない。東西幅0.6m以上、南北長6.4mで、検出面からの深さは0.5mである。埋土は、地山粒を含む暗褐色または黒褐色の自然堆積土である。

### (3) 中世

**S D 9593** ②トレンチ中央のH11区d9グリッドで検出された東西溝。検出面での幅1.8m、底面の幅1.2m、深さ0.4mで、断面は逆台形を呈する。方位はW-6°-N。埋土は黒褐色粘質土である。

遺物としては、中世の土師器、いわゆる「山茶碗」などが出土した。

**S D 9610** ⑥トレンチ東端のH11区x14・y14グリッドで検出された溝。幅は2.0～2.2m、検出面からの深さは1.2mと、かなりの規模を有しているが、これまでの調査で発見されている溝の延長部分とは考えられなかつたため、精確な主軸方位と時期を探るべく、⑥トレンチ西端から約3.5mの位置に南側への拡張トレンチを設定した。検出当初、SD9610の平面形状は緩やかに弧を描いているようにも見えたが、拡張部分と合わせると非常に直線的な溝であることが判明した。埋土は、上層が黒褐色土で、下層が暗褐色粘質土である。方位は概ねE-22°-Nである。

遺物としては、上層から土師器・陶器・磁器、下層から土師器・いわゆる「山茶碗」の小片が出土した。

## 4 遺物

出土遺物は主に弥生時代～中近世の土器・陶磁器などで、コンテナケース18箱分ほどの量である。

### (1) 弥生時代

主に方形周溝墓から弥生土器が出土した。壺が大半を占めており、甕・高杯は非常に少ない。

**S X 9591** 無文の広口壺（1）がある。あまり外反しないで直線的に開く単純口縁の頸部を有し、外面全面にヘラ磨きが施されている。

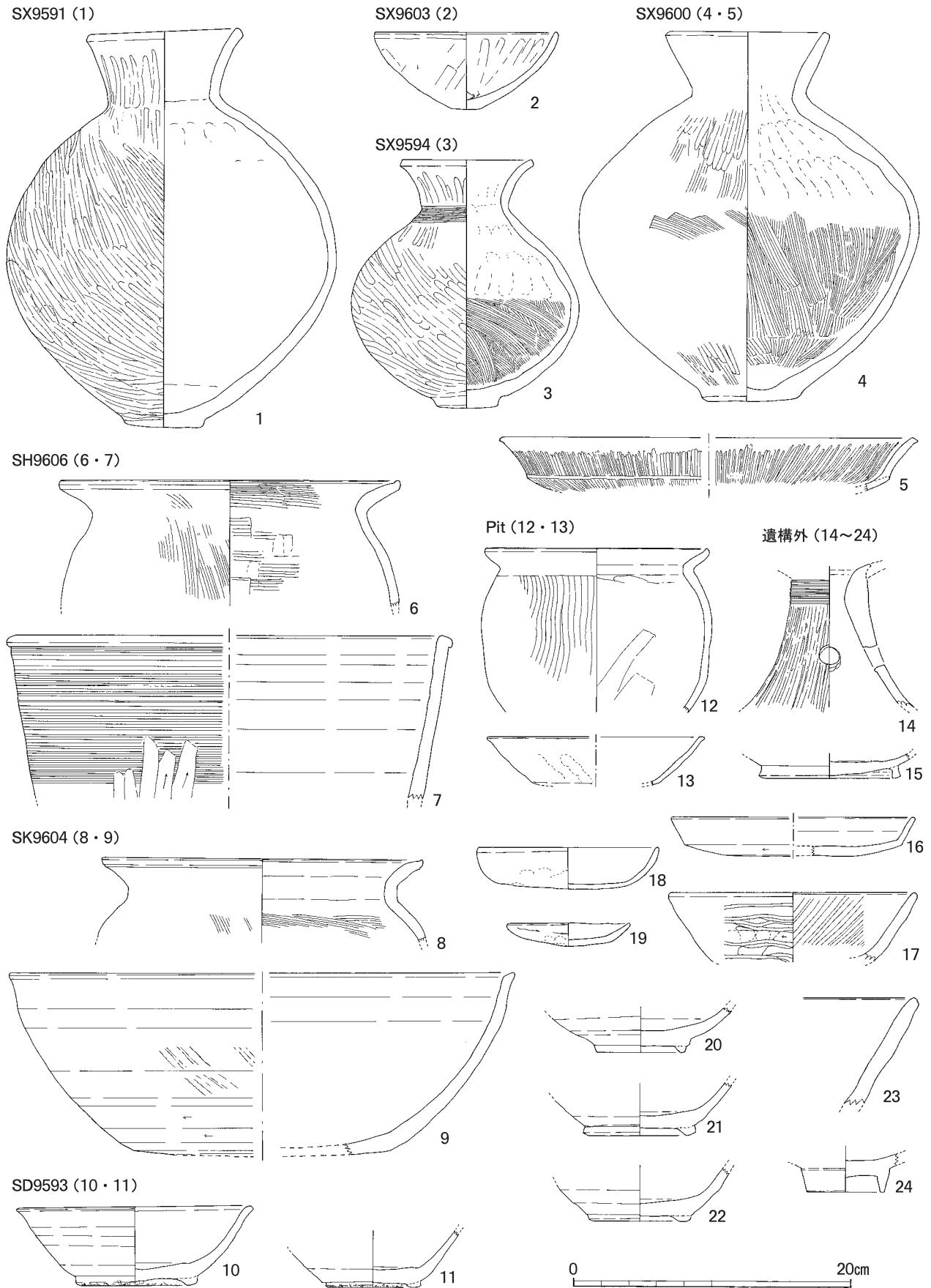
時期については、弥生時代後期に比定される。

**S X 9594** 頸部に櫛描直線文が施された小型の広口壺（3）がある。やや外反しながら開く単純口縁の頸部を有し、外面全面にヘラ磨き、内面下半には刷毛目が認められる。

時期については、弥生時代後期に比定される。

**S X 9600** 広口壺と高杯がある。無文の広口壺（4）は、直線的に開く単純口縁の頸部を有し、外面全面に粗いヘラ磨きが施されているが、胴部付近にはヘラ磨きの下に刷毛目が明瞭に認められる。また、内面下半にも刷毛目が認められる。高杯（5）は外反する口縁部の破片で、内外面にヘラ磨きが施されている。

時期については、4・5とも弥生時代後期に比定



第II-10図 第149次調査 出土遺物実測図 (1:4)

される。

**S X 9603** 壺と小型鉢がある。小型鉢（2）は、やや内湾気味の体部をもつもので、内面にはヘラ磨きが、外面にはヘラ削りの上にナデが施されている。

時期については、弥生時代に比定される。

**遺構外** 方形周溝墓周辺を中心に、弥生時代後期の土器（甕・壺・高杯）が出土しているが、第132次調査など周辺地域での調査と比べると量的には少ない。

②トレンチ表土出土の赤彩器台脚部（14）は、外面全面にヘラ磨き、受け部との境付近に櫛描直線文が施されている。脚の中央部には、円孔が穿たれており、残存しているのは3個だけだが、位置関係から判断して、元は4個穿孔されていたと考えられる。

## （2）古代

**S H 9606** 土師器（甕・杯G）・須恵器がある。須恵器鉢（7）は、口縁部が玉縁状に外側へ膨らんだ形状を呈するもので、胴部は直線的である。胴部下半が残存していないため、断定はできないが、内面には黒色炭化物が口縁部まで付着しており、甕ではないかと思われる。

**S K 9604** 土師器（長胴甕・甕・皿・杯G）・須恵器（甕・鉢・杯）・鉄滓がある。須恵器の大型深鉢（9）は、ナデと削りによって最終的に整形されているが、外面には叩き工具（平行）の痕跡も認められる。胎土と形状から、8世紀前半頃の美濃須衛窯産と推定される。

**Pit・遺構外** 土師器（杯・皿・甕）・須恵器（蓋・杯・杯B・瓶・壺・甕）・灰釉陶器（碗・瓶）・白磁（碗・袋物）などがある。

土師器の杯・皿には、斎宮土器編年の第I期～第II期第3段階のものまで認められる。ただし、器壁が厚く、ヘラ削り・ヘラ磨き・暗文（一段放射状暗文・螺旋暗文）などが施されたものが目立つ傾向にあり、全体に平安時代よりも飛鳥・奈良時代のものが多いと思われる。

平安時代の土師器としては、a 12 グリッド Pit 2 から出土した外面の刷毛目が非常に粗い土師器甕（12）や口縁部が大きく開く形状の土師器杯（13）があり、斎宮土器編年の第II期第3・4段階に比定できる。

17は、⑤トレンチから出土した土師器杯で、内面

に放射状暗文、外面に粗いヘラ磨きが施されている。

須恵器には、伊勢在地窯産のほか、美濃須衛窯産（杯15・皿16）と猿投窯産とみられるものがある。灰釉陶器は、高台の断面形が四角形を呈する碗や瓶類の小片がある。白磁碗（24）は高く細い高台を有するもので、大宰府出土中国陶磁分類（森田・横田1978）の白磁碗V類（12世紀後半頃）に相当する。この他、図化していないが、白磁碗IV類の口縁部や白磁壺（おそらく四耳壺）の小片がある。

## （3）中世以降

**S D 9593** いわゆる「山茶碗」（10・11）は、藤澤良祐氏による編年（藤澤1982・1994）の「渥美・湖西型山茶碗」第II型式や「尾張型山茶碗」第6型式に比定されるものである。

**遺構外** 中世の遺物として、土師器（皿・小皿・鍋）・いわゆる「山茶碗」・常滑陶器（鉢・壺）・青磁、近世の遺物として土師器（鍋）や常滑陶器（赤物）、瀬戸美濃窯産の施釉陶器、染付磁器、銅錢（寛永通宝）などがある。

いわゆる「山茶碗」には、藤澤良祐氏による編年の「渥美・湖西型山茶碗」第II型式や第III型式第1小期などに比定できる碗（21・22）や、小皿・（片口）鉢がある。

青磁は体部外面に鎬蓮弁文が施されたもので、大宰府出土中国陶磁分類の青磁碗I-5類（13世紀中葉頃）に相当する。

## 5 まとめにかえて

今回の調査で、最も注目されたのは通称「南北道路」（S F 8945）が検出されなかったことである。この道路は、古代の官道と目されている「奈良古道」から分岐する奈良時代の道として最近注目されており、初期斎宮の解明にも関わる問題と考えられるので、この点に触れて報告のまとめにかえたい。

「南北道路」に関連するとみられる遺構の発見は非常に古く、斎宮跡の発掘調査が始まったばかりの第2次調査（1971年）にまで遡る。しかし、この時点では「南北道路」の西側側溝が検出されていたに過ぎなかった。

その後、第30次調査（三重県斎宮跡調査事務所1981）において初めて「南北道路」の両側溝が同時

に確認されたものの、概報には、奈良時代の遺構として「8mの間隔をへだてて平行する溝」と記述されるにとどまり、未だ道路遺構との認識はなかったようである。

しかし、第30次調査区の南側で実施した第132次調査の際には、第30次調査で検出された平行する溝が道路に伴う側溝であるとの認識に基づき、東側側溝の延長線上に調査区が設定された。そして調査の結果、「規模・形状が概ね類似していることから同一の溝」と考えられる溝が確認され、「南北道路」はさらに南へ延びていると考えられるようになった（水橋2003）。

さらに、第30次調査の北側で行われた第141次調査では、再び両側溝が確認され、第2次調査で検出されていた溝を西側側溝の延長部分とみなす視点と共に、「南北道路」が「奈良古道」と合流する可能性が指摘されている（小濱2005）。

今回の調査では、①トレンチのやや西側が「南北道路」の東側側溝（第132次調査SD8346）の延長部分に当たるため、①トレンチ北端を西側へ拡張し検出を試みた。しかし、周囲の地形や検出面の高さからみて、後世の削平により完全に壊されてしまったとは想定しにくい場所であるにもかかわらず、側溝は検出されなかった。つまり、「南北道路」は①トレンチの場所にまで延びていない、と考えられるのである。

ところが、第132次調査と今回の調査結果からは、両調査区の間に、道路の行き着く先としてふさわしい古代の施設等は想定しにくい状況にあり、「南北道路」は今次調査①トレンチよりも北側で大きく屈曲しているのではないかと考えられる。現時点では、「南北道路」が東西どちら側へ屈曲しているのか、確たる根拠を提示することは困難だが、これまでの調査結果からすると、西側に飛鳥・奈良時代の大規模施設の存在が想定されるので、どちらかといえば、西へ曲がる可能性のほうが高いと考えられる。

なお、「南北道路」の時期については、第30次調査で奈良時代、第132次調査で奈良時代前期、第141次調査で斎宮土器編年第I期第2～3段階の遺物が出土したことから、奈良時代に属するものと考えられている（小濱2005）。しかし、第30次調査ではこ

の西側側溝のすぐ脇から、主軸方位を同じくする堅穴住居S B 1615が検出されており、この堅穴住居から出土した土器が斎宮土器編年第I期第1段階（飛鳥時代）の標式遺物であることは、道路の敷設が飛鳥時代にまで遡ることを示唆している。

一方、「南北道路」の廃絶時期については、側溝からの出土遺物が少ないこともあり、明確ではない。路面の真ん中にすっぽり収まるように検出された堅穴住居S H 8884（第141次調査）の出土遺物が決め手になるかとも思われたが、斎宮第I期第2段階（奈良時代前期）の遺物が少量出土したに過ぎず、決め手に欠けている。ただ、出土した土器からみて、道路側溝や路面に重複する遺構の多くが、奈良時代前期の範疇に収まる可能性が高いことに加え、平面観察からも土層観察からも道路側溝の掘り返し痕跡が確認されないことからすれば、飛鳥時代から奈良時代前期の比較的短期間のうちに機能を失ったとも考えられる。

今回の調査は、初期斎宮の場所や範囲を確認するという目標の下に行ったものだが、該当する時代の遺構は数が少なく、斎宮中枢部を構成するような性格のものとは考えられない。

やはり、この5年間の範囲確認調査や周辺地域での過去の調査結果を加味すると、初期斎宮は今回の調査地点よりも西側もしくは北側に存在した確率が高いと考えられる。したがって、その場所を確定するためには、今次調査区よりも北西側での面的な調査が必要だが、今回確認されなかった「南北道路」の行方も、初期斎宮解明の一つの重要な鍵になるのではないかと思われる。

（水橋公恵）

#### 参考・引用文献

- 小濱 学 2005 「第141次調査」『史跡斎宮跡 平成15年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館  
藤澤良祐 1982 「瀬戸古窯址群I」『研究紀要I』瀬戸市歴史民俗資料館  
藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター  
三重県斎宮跡調査事務所 1981 『三重県斎宮跡調査事務所年報1980 史跡斎宮跡 発掘調査概報』  
水橋公恵 2003 「第132次調査」『史跡斎宮跡 平成13年度発掘調査概報』斎宮歴史博物館  
森田勉・横田賢次郎 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』四

第Ⅱ-1表 第149次調査 遺構一覧表

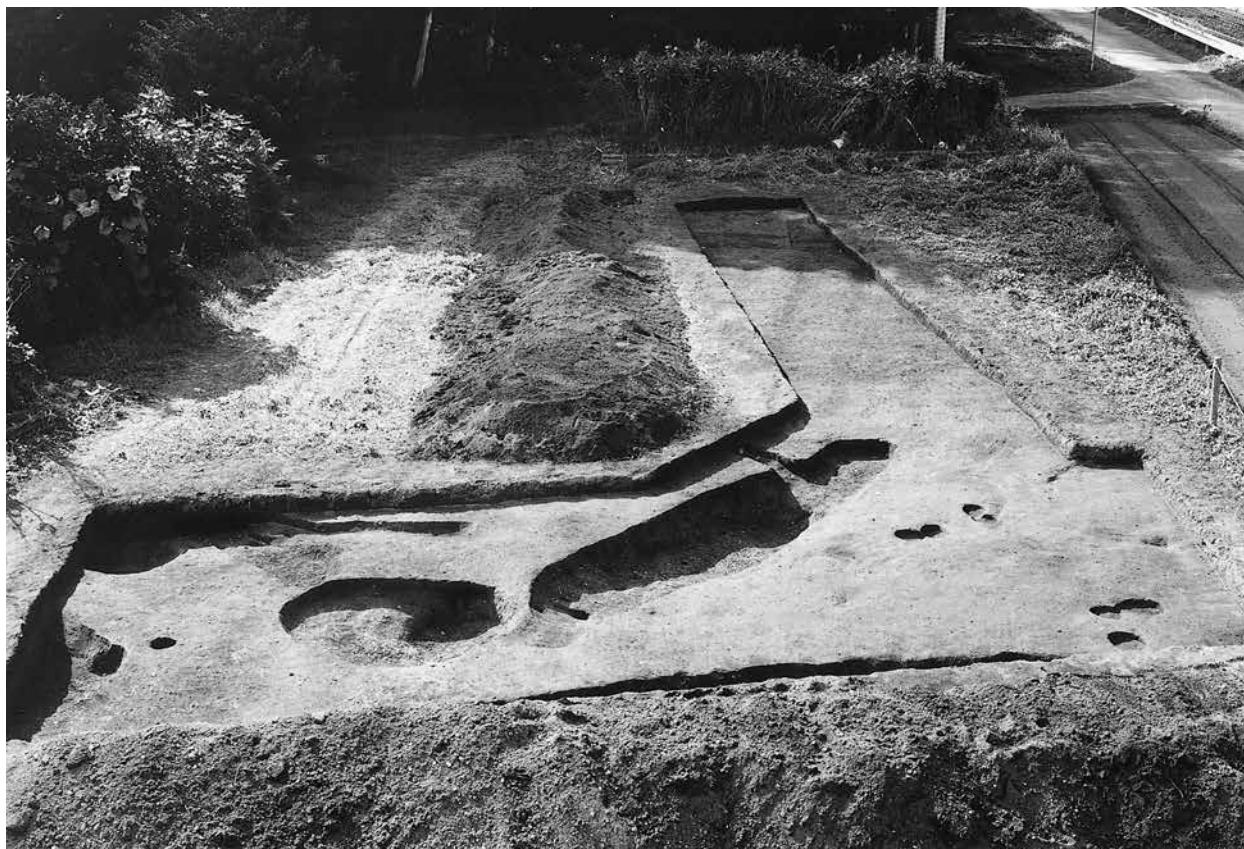
遺構名	種別	調査時 遺構名	トレンチ	地区	グリッド	時期 (斎宮編年)	概要
S X 9591	方形周溝墓	溝2 1	①	H 11	d 5	弥生時代後期	本文参照
		溝2 3			d 6		
S D 9592	溝?	溝1 7	①	H 11	d 5	古代?	本文参照
S D 9593	溝	溝2	②	H 11	d 9	中世前期以降	本文参照
S X 9594	方形周溝墓	溝5	②	H 11	d 9・d 10	弥生時代後期	本文参照
S D 9595	溝?	溝1	③	G 11	X 12	中世以降	長さ4.2m×幅1.1m~、深さ0.4mの南北溝。しまり非常に悪い。古代~中世の土師器・須恵器・陶器が出土。
S D 9596	溝	溝9	③	G 11	y 12	平安前期頃? (II-3?)	幅0.3mのL字溝。北東溝2.4~、南東溝1.5m、深さ0.2m。古代の土師器小片が出土。
S D 9597	溝	溝1 1	③	H 11	a 12	近世以降	長さ2.0m×幅0.3m~、深さ0.2mの南北溝。土師器・近世陶器が少量出土。
S D 9598	溝	溝1 0	③	H 11	b 12	近世以降	長さ3.0m×幅0.3m、深さ0.2mの弧状溝。土師器・近世陶器が少量出土。
S D 9599	溝	溝6	③	H 11	c 12	中世前期以降	長さ2.0m×幅1.0m、深さ0.1mの南北溝。暗褐色粘質土。古代~中世の土師器・陶器が出土。
S X 9600	方形周溝墓	溝4	③	H 11	c 12~e 12	弥生時代後期	本文参照
S X 9601	溝	溝8	③	H 11	e 12	中世前期以降	S X 9600の東北溝の外側に沿う溝。長さ5.2m×幅0.8~1.8m、深さ0.4m。いわゆる「山茶碗」が出土。
S D 9602	溝	溝7	③	H 11	e 12・f 12	中世後期以降	長さ4.2m×幅0.5~0.8m、深さ0.05m。古代~中世の土師器の小片が少量出土。攪乱か?
S X 9603	方形周溝墓	溝1 9	④	H 11	d 15	弥生時代後期	本文参照
S K 9604	土坑	溝2 0	④	H 11	d 19	飛鳥~ 奈良時代前期頃	本文参照
S D 9605	溝	溝1 2	⑤	H 11	o 12・p 12	中世後期以降	長さ5.2m×幅0.3m、深さ0.15mの弧状溝。古代~中世の土師器・陶器が少量出土。
S H 9606	竪穴住居	竪穴1 8	⑤	H 11	p 12・q 12	飛鳥~ 奈良時代前期頃	本文参照
S K 9607	土坑	竪穴1 3	⑤	H 11	r 12・s 12	古代	本文参照
S D 9608	溝	溝1 5	⑥	H 11	t 14	磁器不明	長さ6.5m×幅0.6m、深さ0.2mの南北溝。土師器・須恵器・近世磁器が少量出土。
S D 9609	溝	溝1 6	⑥	H 11	u 14	時期不明	長さ4.4m×幅0.7m、深さ0.1の南北溝。土師器小片が1点出土。
S D 9610	溝	溝2 2	⑥	H 11	x 14・y 14	不明	本文参照
S D 9613	溝	溝2(南)	②	H 11	d 9	弥生時代?	S D 9593として検出したが、別遺構と判明。幅1.7m、深さ0.2m。土層観察ではS X 9594よりも古いと考えられた。

第Ⅱ-2表 第149次調査 掘立柱建物一覧表

通番名	整理時 遺構名	地区	Gr	ピット番号	遺物の時期	建物時期	規模 東西間×南北間 (m)	柱間 (東西-南北)	主軸	方位 (N基準)	備考
S B 9611	建物1	H 11	b 12	p 1		古代	3 (5.9) × *	2.1・1.9-*	東西?	N 1° W	本文参照
			c 12	p 1・2							
S B 9612	建物2	G 11	y 12	p 3		古代	3 (6.8) × *	2.4・2.3・2.1-*	東西?	N 3° E	本文参照

第Ⅱ-3表 第149次調査 出土遺物観察表

番号	器種	器形	地区・遺構	法量 (cm)	調整・技法の特徴	胎	土	焼成	色調	残存度	備考	登録番号
1	弥生土器	壺	S X 9591	口径 11.2 器高 28.5	外: 口縁部ヨコナデ, 体部ヘラミガキ, 底部調整なし 内: 口縁部ヨコナデ, 以下ユビオサエ・ ナデ	並	並	橙 7.5YR7 / 6	口 3 / 12 体一部欠損	外面下半に黒斑	001-01	
2	弥生土器	小型鉢	S X 9603	口径 13.2 器高 5.6	外: ケズリ後ナデ 内: ヘラミガキ, 底部工具痕	並	並	橙 7.5YR7 / 6	3 / 12		002-02	
3	弥生土器	壺	S X 9594	口径 9.5 器高 17.9	外: 口縁部ヨコナデ, 頸部櫛描直線文, 体部ヘラミガキ, 底部ケズリ調整 内: 口縁部ヨコナデ, 体部上半ユビオ サエ, 下半ハケメ	並	並	橙 7.5YR7 / 6	完形		002-01	
4	弥生土器	壺	S X 9600	口径 11.8 器高 26.6	外: 口縁部ヨコナデ, 体部上半タテハ ケ・ヘラミガキ, 下半ナナメハケ・ヘ ラミガキ 内: 口縁部ヨコナデ, 体部上半ユビオ サエ, 下半ハケメ	並	並	にぶい黄橙 10YR7 / 4	体 1 / 4 欠損		003-01	
5	弥生土器	高杯	S X 9600		外: 口縁部ヨコナデ, 以下ヘラミガキ 内: 口縁部ヨコナデ, 以下ヘラミガキ	並	並	にぶい黄橙 10YR7 / 4	口 1 / 12 以下		002-03	
6	土師器	甕	S H 9606	口径 24.5	外: 口縁部ヨコナデ, 以下ハケメ 内: 口縁部ヨコハケ, 以下ユビオサエ 後ヨコハケ	並	並	橙 7.5YR7 / 6	口 1 / 10		004-02	
7	須恵器	鉢	S H 9606		外: 口縁部回転ナデ, 体部上半カキメ, 下半ヘラケズリ 内: 回転ナデ	φ 1mm以下の白色 粒、黒色粒含む	やや 生	灰白 7.5Y7 / 1	口 1 / 8		004-01	
8	土師器	甕	S K 9604	口径 23.0	外: 口縁部ヨコナデ, 以下ハケメ 内: 口縁部ヨコナデ, 以下ハケメ	並	並	にぶい黄橙 7.5YR7 / 4	口 1 / 3		005-01	
9	須恵器	鉢	S K 9604		外: 口縁部回転ナデ, 体部上半回転ナ デ, 下半回転ケズリ 内: 口縁部回転ナデ, 以下ヨコナデ	φ 0.5mmの白色粒 多く含む	並	灰白 5Y7 / 1	1 / 12		005-02	
10	陶器	椀	S D 9593	口径 17.0 器高 5.8	外: 回転ナデ, 底部板状圧痕, 高台ハ リッケ 内: ヨコナデ	やや砂っぽい	並	灰白 10Y8 / 1	7 / 12	いわゆる「山茶碗」 高台に剥離痕多し	006-04	
11	陶器	椀	S D 9593	高台径 6.8	外: 回転ナデ, 回転糸切り痕, 高台ハ リッケ 内: コテナデ	砂粒多く含む	並	灰白 10Y8 / 1	完形	いわゆる「山茶碗」 高台に剥離痕多し	006-03	
12	土師器	甕	a12 Pit2	口径 16.1	外: 口縁部ヨコナデ, 以下タテハケ 内: 口縁部ヨコナデ, 体部上半板ハケ, 下半板ハケ・ケズリ	並	並	にぶい黄橙 10YR7 / 3	2 / 12	外面に炭化物多く付着	006-01	
13	土師器	杯	a12 Pit2		外: 口縁部ヨコナデ, 以下ユビオサエ 内: ヨコナデ	並	並	橙 5YR6 / 6	小片		006-02	
14	弥生土器	器台	d10 表土		外: 上部櫛描直線文, 以下ヘラミガキ, 穿孔 内: ヨコナデ	並	並	明黄褐 10YR7 / 6	脚 6 / 12	外面と内面上部に赤彩	006-06	
15	須恵器	杯	d9 表土		外: 回転ナデ, 底部回転ケズリ 内: 回転ナデ	並	並	灰白 5Y7 / 1	底 11 / 12		007-06	
16	須恵器	皿	s12 表土	器高 2.8	外: 体部回転ナデ, 底部回転ケズリ 内: 回転ナデ	並	並	灰白 5Y7 / 2	2 / 12		007-01	
17	土師器	杯	s12 表土	口径 17.8	外: 口縁部ヨコナデ, 体部上半ユビオ サエ・ヘラミガキ, 下半ケズリ・ヘラ ミガキ 内: ヨコナデ, 放射状暗文	並	並	橙 5YR6 / 8	1 / 10		007-02	
18	土師器	皿	d6 表土		外: 口縁部ヨコナデ, 以下ユビオサエ 内: 調整不明	並	並	にぶい黄橙 10YR7 / 4	9 / 12	内面摩耗顯著	007-07	
19	土師器	小皿	C12 カクラン	口径 8.8 器高 1.6	外: 口縁部ヨコナデ, 以下ユビオサエ 内: 口縁部ヨコナデ, 以下ナデ	粗	やや 軟	浅黄 2.5Y7 / 4	6 / 12		006-05	
20	陶器	椀	d9 表土		外: 回転ナデ, 回転糸切り痕 内: コテナデ	やや密	やや 軟	淡黄 2.5Y8 / 3	4 / 12	いわゆる「山茶碗」 内面に油煙、黒色炭化物 付着	007-03	
21	陶器	椀	p12 表土		外: 回転ナデ, 高台ハリッケ 内: コテナデ	並	並	灰白 2.5Y8 / 2	底完形	いわゆる「山茶碗」 内面摩耗	007-05	
22	陶器	椀	S12 カクラン		外: 回転ナデ, 回転糸切り痕 内: コテナデ	砂っぽい	並	灰黄 2.5Y7 / 2	底完形	いわゆる「山茶碗」 内面やや摩耗	007-04	
23	常滑陶器	鉢	s12 表土		外: ヨコナデ 内: ヨコナデ	φ 0.5mmの白色 粒多く含む	堅緻	断面: 黄灰 2.5Y6 / 1 表面: にぶい褐 7.5YR5 / 3	破片		008-01	
24	白磁	椀	r12 表土	高台径 5.5	外: 回転ケズリ 内: 白磁釉	並	並	灰白 5Y7 / 1	底 4 / 12		007-08	



①トレンチ全景（東から）



②トレンチ全景（北から）



③トレンチ全景（東から）



④トレンチ全景（北から）



⑤トレンチ全景（東から）



⑥トレンチ全景（西から）

第149次調査 遺構(4)

写真図版II-4



S X 9600 (東から)



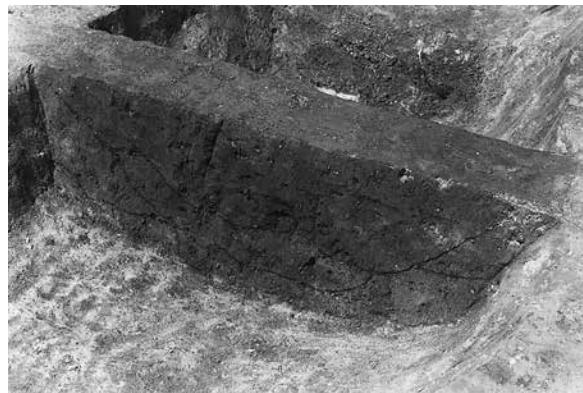
S B 9611・9612 (東から)



S H 9606 (西から)



S D 9610 (南西から)



S X 9591 土層（南東から）



S X 9591 遺物出土状況（東から）



S X 9594 遺物出土状況（南東から）



S X 9600 遺物出土状況（南東から）



S D 9610 土層（南西から）





### III 第150次調査 (6AU9・10 東加座地区)

#### 1 はじめに

史跡の東部で存在が確認される方格地割が、桓武朝期に整備されたものであることは、現在の斎宮研究では大方の同意を得ている。しかし方格地割の造成のための設計プランについては、調査データの十分な検討にまではいたっているとはいえない。また、これまで知られている方格地割を構成する道路の側溝遺構についても、斎宮存続期以降も含めた遺構の重複の状況を十分に検討した上で評価を加えてきたわけではない。

奈良時代後期から平安時代の斎宮を理解する上で最も重要な課題のひとつである方格地割についてより具体的なデータを得るために、今回の第150次調査

では、方格地割北東部の東加座北①区画南東隅の交差点部分を調査し、交差点の実態解明とともに、方格地割の構造解明への手かかりを得ることを目的に実施した。

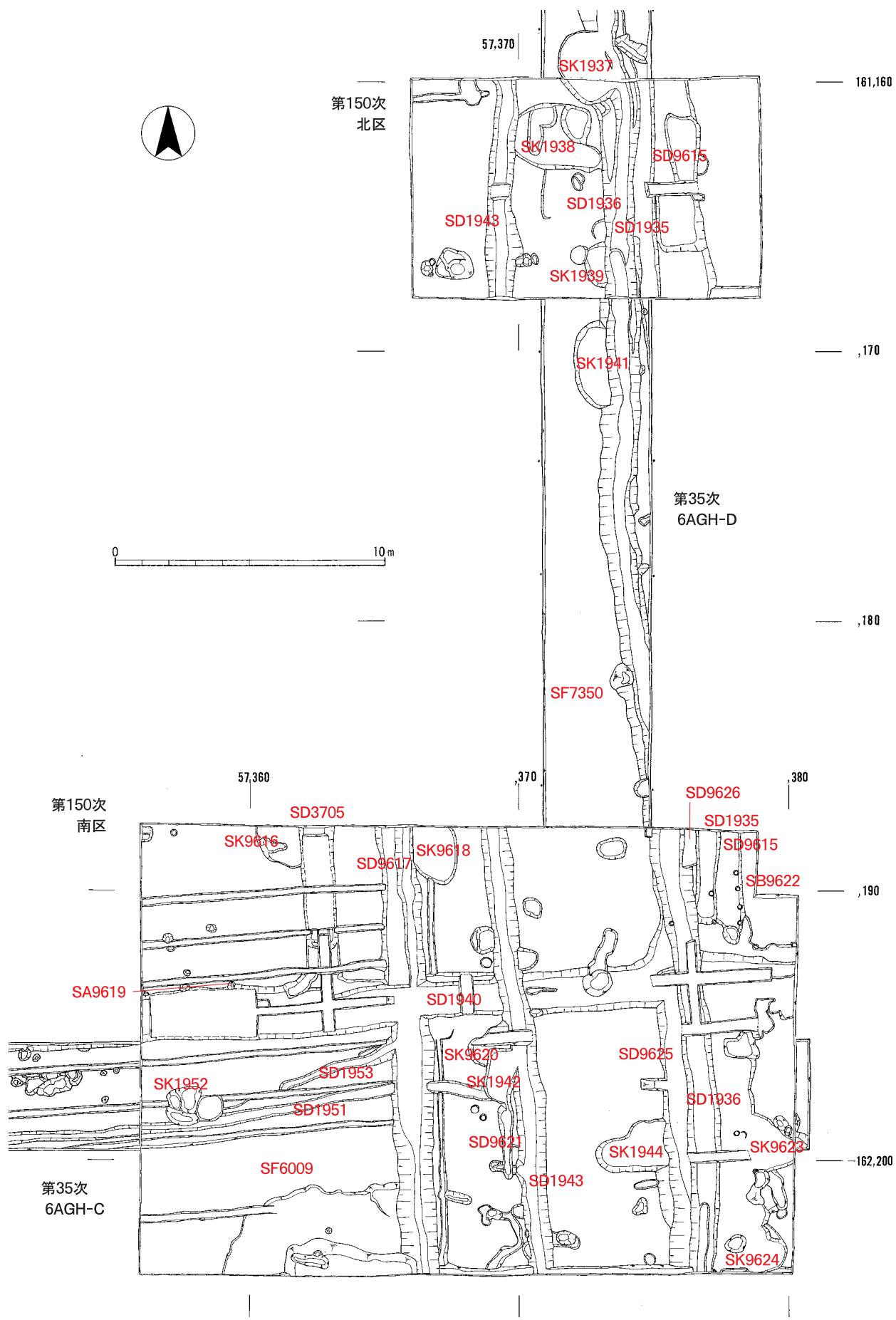
調査面積は500m<sup>2</sup>、調査区は昭和55年度に実施した第35次調査6AGH-D、6AGI-Aのトレーニチに重複し交差点部分にあわせる形で南北区、その北側約20mに南北道路の延長を確認するための北区の二つの調査区を設定した。調査期間は平成18年10月16日～平成19年1月10日である。

#### 2 地形と層位

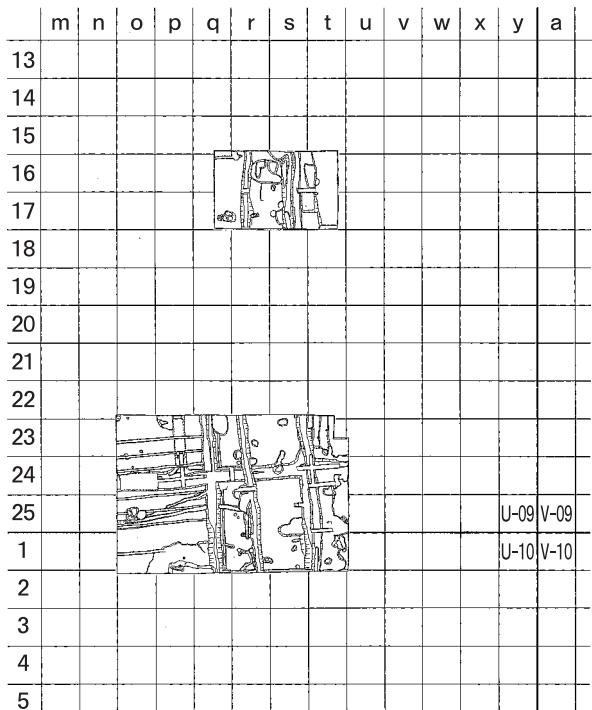
第150次調査を実施した東加座地区では方格地割の区画名称でいう東加座北①区画、東加座南①区画



第三一図 第150次調査 調査区位置図 (1:2,000)



第III-2図 第150次調査 平面図 (1:200)



第III-3図 第150次調査 大地区・グリッド図（1:800）

が史跡の保存管理区分の第一種保存地区に含まれており、調査区および周辺は明和町公有地ないしは民間の畠地となっている。

現地の標高は8.7～8.8mで、東にむかって緩やかに傾斜していくとともに北区付近の標高約8.6mにむかって南からも北からも傾斜してくる東西方向に浅い谷状の地形となっている。

調査区での遺構検出面は南区で黒色シルト質壤土（黒ボク土）とその下層の灰白色シルト質粘質壤土、北区で黒色シルト質壤土（黒ボク土）ないし黄褐色～淡黄色の粘質土だが、現況地表面からは北区で約15cm、南区で約20cm厚の耕作土直下で達する。

黒色シルト質壤土は北区でほぼ全面、南区では西半部分で確認でき、調査の過程でも極力この上面での遺構検出を試みたが、今回の調査区内で主体的な溝遺構の規模や重複関係を明確にして遺構の調査を進めるために、最終的にさらに10～15cm掘り込んで遺構の検出を行った。

また、今回の調査にあたって、貴重な交差点の道路側溝の埋土の情報を残すため、主要な溝の埋土や、埋土の層位の情報を極力残すよう配慮した。

### 3 遺構

第150次調査の調査区範囲では先述のとおり第35次調査の2本のトレンチ調査を実施しており、断続的ながら道路側溝とみられる溝遺構が確認され、それにより構成される交差点に当たる箇所と想定されてきたが、今回さらに北方の第57次調査で確認されている溝1条の延長も含め、方格地割を構成する道路側溝と交差点や土坑を検出・確認した。

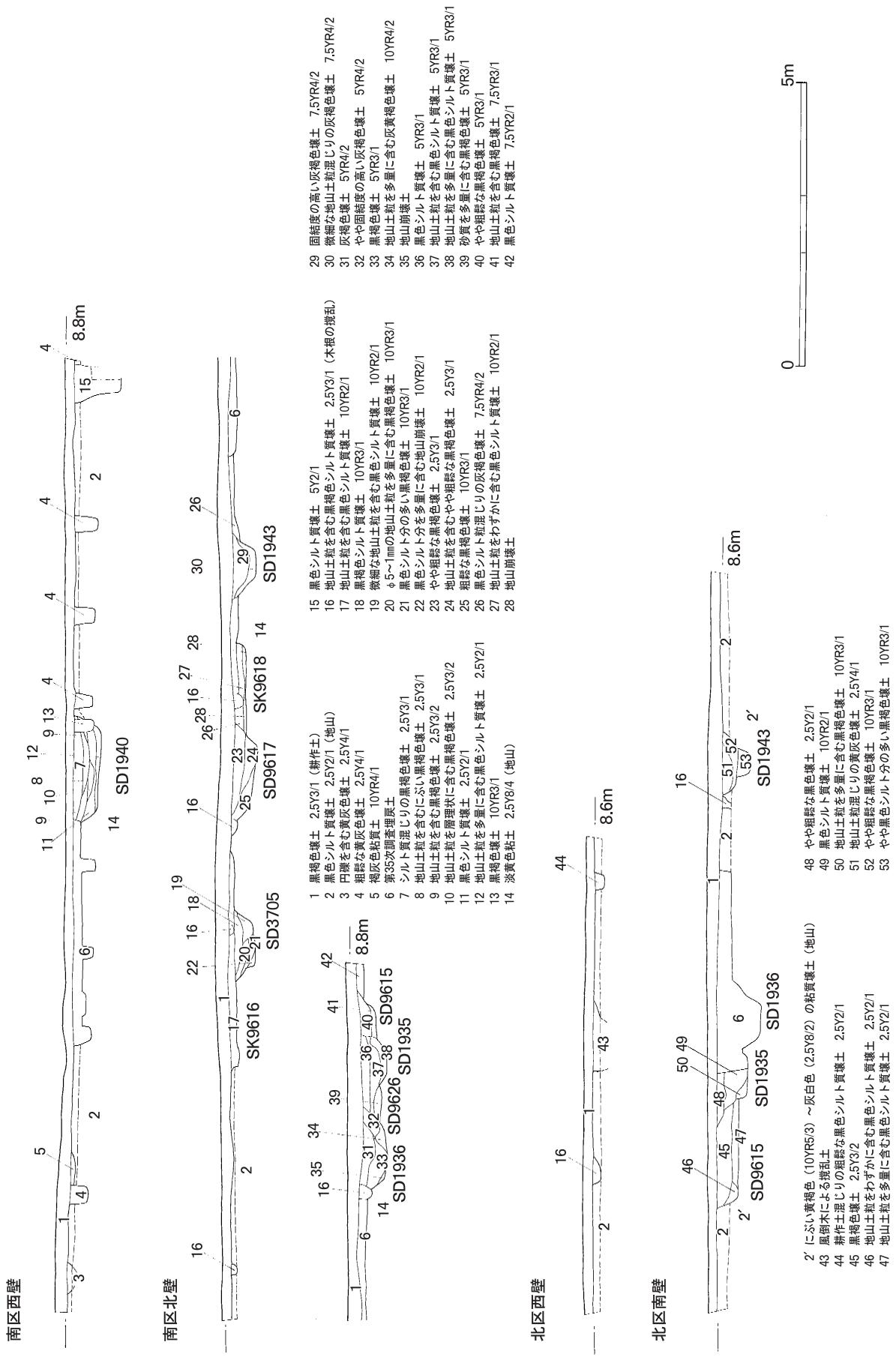
#### （1）斎宮II期の遺構

斎宮跡土器編年によるII期のうち、II-1～2期に該当する出土土器を伴う遺構を確認した。今回の調査区内にかかるものでは溝5条、区画道路2本、土坑7基、柵列と道路側溝に伴うとみられる掘立柱群各1がある。

**SD 3705** 南区北西部で確認した方格地割の南北道路S F 7350の西側溝である。検出段階では南端で東西方向のSD 1940に重複されてつながる形で確認されたが、第III-5図の埋土断面図のようにSD 1940から1mほどのところで約25cmほど一段深く掘り込まれている。このような状況は、今回のひとつ西側に位置する交差点部分での第120次調査でも確認されている。断面は逆台形となる。また、東西溝SD 1940から南では、その延長を確認できなかった。検出した幅で約1.2m、深さは南区北端で約0.4mである。埋土には破碎した状態で斎宮跡土器編年でII-1～2期の土器類や、溝底部からはやや浮いた状態だが鉄斧が出土した。後述する東側溝と異なり後代の再掘削の痕跡はほとんどみられず、方格地割営当初の規模と形状をおおむねとどめているものとみられる。また出土遺物がII-1期をさかのぼらないことも方格地割営時期の一端を示すものと考えられる。

なお、SD 3705は今回の南区の北約50mで実施した第57次調査でもその延長が確認されており、ほぼ同様の規模と形状であることが分かる。

**SD 9626** 南区北東隅で、SD 3705に対応する東側溝を調査する中で、面的には検出できなかったが、溝底部の存在と埋土の断面観察からわずかに残存していたものを確認した。これまでの周囲のトレンチ調査や北方の第57次調査でも検出されておらず、出



第III-4図 第150次調査 土層断面図 (1:100)

土遺物も確認できなかったが、残存する埋土の重複関係では後述する SD 1935 より古いものである。調査区内で確認した延長は 1.4m、底部の幅は 0.5m ほどで平底状であるため、西側溝の SD 3705 同様、逆台形のものであったと推測される。底部の南端にわずかな立ち上がりがあるため、東西道路の北側溝に達する前に途切れていた可能性がある。断面形も底部に残るわずかな立ち上がりのカーブから想定すると、肩幅で 1.1 ~ 1.2m 程度のものが復原され、SD 3705 ともよく対応しているため、これが方格地割造営当初の東側溝であったと考えられる。

**SD 1935** 第 35 次調査の 6 AGH-D トレンチや、第 150 次調査北方の第 57 次調査、南方の第 40 次調査でも確認されており、当初から方格地割南北道路の東側溝と目されてきた溝である。

今回の調査では、北区で延長 8 m 分と南区で 3.5m 分をあらためて確認した。上端を SD 1936 などに壊されているが、検出幅で 0.9m 前後、遺構確認面からの深さが北区で 0.5m、南区で 0.45m の断面逆台形の溝である。南区では東西溝 SD 1940 の北約 1.0m のところでこの SD 1935 は途切れており、西側溝の SD 3705 と同様の形状を示しており、その延長とみられる溝も SD 1940 の南で確認されなかつことから、SF 7350 の東側溝もまた、造営当初から II 期の間に交差点の手前で途切れていたものと判断できる。

今次調査区内での出土遺物は多くないが、第 35 次調査の 6 AGH-D トレンチ出土のものとあわせてみてみると、斎宮跡編年で II - 1 ~ 2 期の土器類が比較的大きな破片で出土していることがわかる。先述の SD 9626 よりは一段階新しいものではあるが、最終的な埋没時期は西側溝の SD 3705 と大差ないものとみられる。

**SD 9615** 北区・南区の両方で SD 1935 の東側に平行して確認された溝状の落込みである。埋土の断面観察からもうかがえるように、SD 1935 に明らかに先行するものだが、SD 9626 との前後関係は分からぬ。北区では最大で約 1 m、南区では約 1.8m ほどの幅がある。底部は平らで、北区では部分的に 0.2m 程度の落込みがある。いずれも底部付近では埋土に地山掘削土である黄橙色系の粘質土を多量に含み、その上層にも地山面上の黒色シルト質壤土が堆積し

ていることから掘削後から短時間で埋没した様子がうかがわれる。形状・埋没状況のいずれからも、他の道路側溝とは異なるものである。出土遺物は斎宮跡編年 II - 1 ~ 2 期の土器片が少量出土したのみで、これにより SD 1935・9626 との時期差は判断できない。

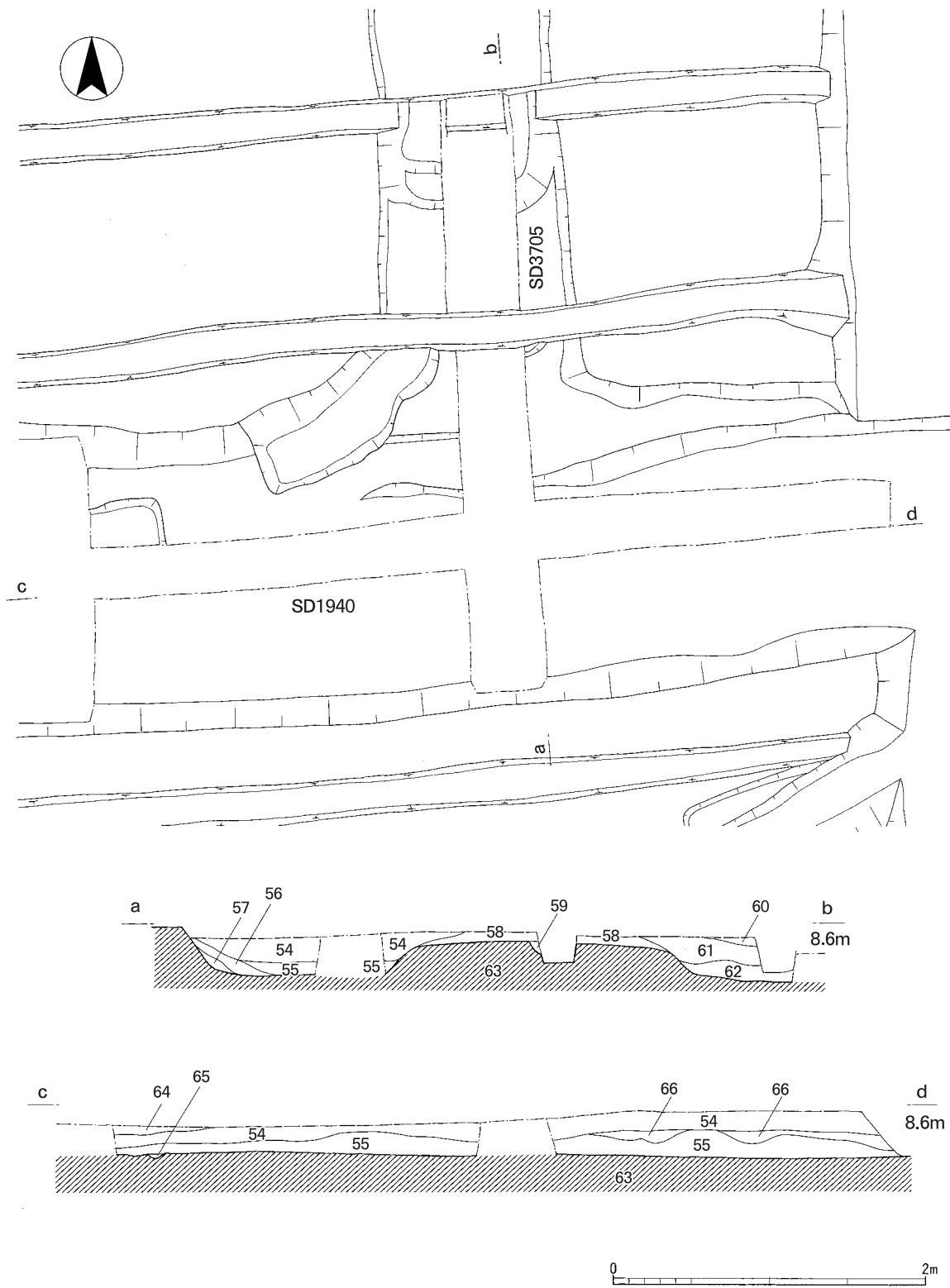
このような幅広い溝状の落ち込みは、第 150 次調査の北方の第 57 次調査では SD 3736 に、南方の第 40 次調査では SD 1936 東側の肩部にといったぐあいに SF 7350 東側溝の広い範囲で同様の形状が認めうる。

この SD 9615 が東側溝の最古段階と目される SD 9626 の肩状の一部となるのか、あるいは道路側溝とは別の犬走りなどを形作るのかは現在判断できないものの、同様の遺構はこれまでの史跡内の方格地割道路の調査で確認されておらず、その機能について注目されるものである。

**SD 1940** 南北道路 SF 7350 に直交する東西道路 SF 6009 の北側溝に対応する溝である。南区の東西の約 24.5m にわたって確認され、第 35 次調査の 6 AGH-C・6 AGI-A トレンチでの分とあわせると連続で延長約 80m ほどを確認している。今次調査の南区の東部では他の遺構との重複が多く、本来の形状が崩れているが、西部の残存状況の良好な箇所でみると幅 1.8 ~ 1.9m で断面の形状がおおむね逆台形である。溝の深さは調査区内で一様でなく、南区西端付近で約 0.5m、中央部で約 0.3m、東部の南北溝と交差するあたりで 0.2m、調査区東端で約 0.3m となっており、調査区の東半では断面の形状もカマボコ状の崩れたものになる。溝底部の標高では調査区の西端と東端ではほとんど差はないが調査グリッドで r24 から s24 の付近で若干底部高が高くなっている。

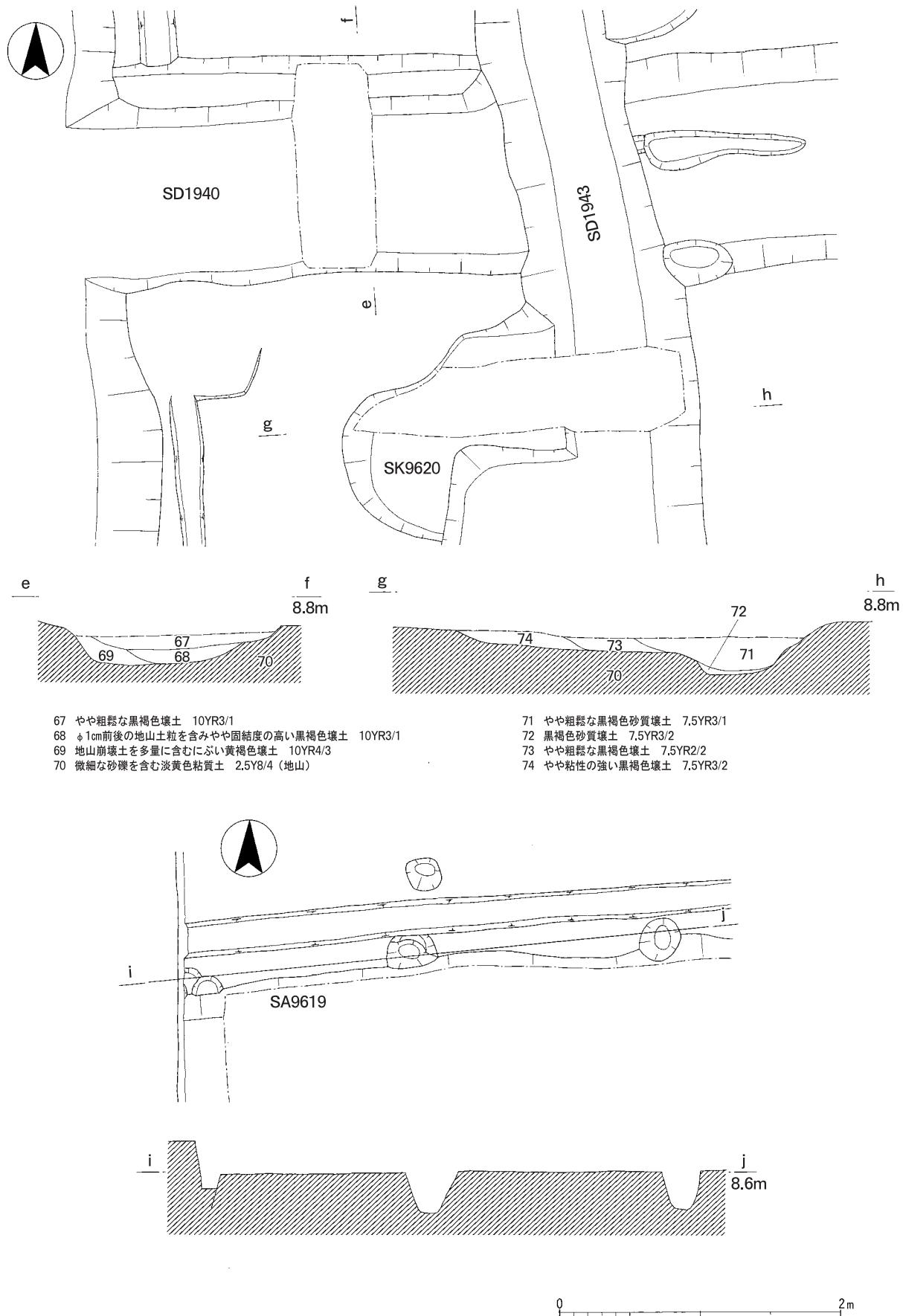
遺物は斎宮跡編年で II - 1 ~ 2 期の土器類が整理箱で 1 箱程度出土しているが、SD 1935 より磨耗した小片も多く、第 III - 5 図の埋土断面の観察からも黒色系の埋土の SD 3705 や SD 1935・9626 よりも後に黒褐色系の埋土により廃絶したとみられ、II - 3 期頃までは存続していた可能性はある。

**SF 7350** 西側溝 SD 3705 と東側溝 SD 9626 ないし SD 1935 により画される方格地割の南北区画道路である。この延長は北では第 57 次調査、南では第 40



- |    |                                     |    |                                |
|----|-------------------------------------|----|--------------------------------|
| 54 | φ1~2cmの地山土粒を含むやや固結度の高い黒褐色壤土 2.5Y3/1 | 61 | やや固結度の高い黑色壤土 10YR1.7/1         |
| 55 | 微細な地山土粒を含む固結度の高い黒褐色壤土 7.5YR3/1      | 62 | 黒褐色粘質壤土 10YR3/2                |
| 56 | 黒褐色砂質壤土 7.5YR3/1                    | 63 | 微細な砂礫粒を含む浅黄色粘質土 2.5Y7/4 (地山)   |
| 57 | 地山崩壊土層                              | 64 | やや固結度の高い黒褐色壤土 2.5Y3/1          |
| 58 | 地山崩壊土を多量に含む黒色壤土 2.5Y2/1             | 65 | 微細な地山土粒を含む固結度の高い黒褐色壤土 7.5YR3/2 |
| 59 | 粗鬆な黒褐色砂質壤土 10YR3/2                  | 66 | やや地山土粒が大きく固結度の高い黒褐色壤土 7.5YR3/1 |
| 60 | 地山土粒を多量に含むやや固結度の高い黑色壤土 10YR1.7/1    |    |                                |

第III-5図 第150次調査 SD 1940・SD 3705 平面図・土層断面図 (1:40)



第三-6図 第150次調査 SD 1940・SD 1943・SK 9620, SA 9619 平面図・土層断面図 (1:40)

次調査と第 106 – 5 次調査で確認されている。

東側溝では遺構の重複があるが、道路規模を復原してみると、東西両側溝の心々間では SD 3705 – SD 9626 で 13.8m (1 尺 = 0.296m 換算でおよそ 46.6 尺)、SD 3705 – SD 1935 で 14.5m (およそ 49 尺)、また SD 9626 の復原溝幅を先述のとおり 1.1 ~ 1.2m と考えれば溝内側の肩間の道路幅で 12.7m 前後 (およそ 43 尺)、溝外側の肩間で 14.9m ほど (50 尺) となる。

道路の方位について遺構の重複がなく、直線的な西側溝 SD 3705 をもとに、精度を高めるため北方の第 57 次まで可能な限り延長したラインで計算して求めると真北に対して西に  $3^{\circ} 58'$  振れた方位が求められ、従来から方格地割でいわれる E  $4^{\circ} N$  の方位と大きな違いはないことがあらためて確認された。

道路上には後代の土坑が掘削されているが、いずれも道路補修のためのものとは考えられず、硬化面や轍状の凹凸も認められない。

**S F 6009** 北側溝 SD 1940 と第 35 次調査 6 A G H – L トレンチ北端の溝遺構群の中に南側溝が想定される方格地割の東西区画道路である。この延長は東では第 35 次調査 6 A G I – A トレンチ、第 64 – 7 次調査、第 89 – 2 次調査で、西側では第 35 次調査 6 A G H – C トレンチ、第 24 次調査、第 120 次調査、第 86 次調査、第 10 次調査でも側溝の延長部分が確認されている。

今回の調査区では、直接道路幅などの規模を判断することができないが、第 86 次調査では溝心々間でおよそ 12.6m、溝内側の肩間で 11m 前後、外側で 14.2m 前後を、第 120 次調査では心々間で 12.5m 前後、肩の内々で 11.4m 前後、外々で 14.7m 前後となっているが、これらの実測値は今回の第 150 次調査と第 35 次調査 6 A G H – L トレンチの遺構の状況に当てはめても齟齬はなく、同等の規模の道路が通じているとみて間違いないだろう。

道路の方位については、S F 7350 ほど側溝の形状が直線的ではないが、第 150 次と第 35 次調査区内で S F 7350 と同様に計測すると真東に対し  $4^{\circ} 1'$  北に振れた数値を得ることができた。

道路面は S F 7350 同様、硬化面や補修痕、轍等は確認していない。

**S K 1937** 北区の北端の 2.8m × 2.0m、深さ 0.6m の略円形の土坑で、第 35 次調査すべて調査されているものを再発掘した。遺物は斎宮跡編年で II – 2 期に相当する土器類が整理箱で 1 箱分出土しており、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器などの比較的大型の破片の他、製塩土器がまとまって出土している点が注目される。遺構の重複関係は確認できないが、出土遺物からは SD 1935 より新しいものであるとみられる。

**S K 1938** S K 1937 の南の 3.0m × 2.5m、深さ 0.1 ~ 0.15m の浅い土坑で、大部分が第 35 次調査で調査されているが、今回、西側 1 / 3 程度を調査して全体が明らかになった。第 35 次調査出土のものとあわせて約 1 箱半の土器類が出土しており、完形のものも含めて大型の破片のものが多い。斎宮跡編年で II – 2 期に相当し、S K 1937 とほぼ同時期のものである。

**S K 9616** 南区の北西部で SD 3705 に重複して確認された土坑である。深さ 0.15m ほどの浅い土坑で、調査区北壁の土層セクション図からは東西 4.5m 程度のものであったことがうかがわれる (第 III – 4 図)。

出土遺物は II – 2 期の土師器類で微細な破片になっており、多くは SD 3705 の埋土内のものが搅乱されているものと考えられる。

**S K 9618** 南区の北辺中央部の土坑で後代の S K 9617 に西肩部を壊されている。長径 3m 前後、短径 2m 前後、深さ 0.2m の浅い土坑である。斎宮跡編年で II 期の中に納まると思われる土師器小片が出土しているが、詳細な時期決定はできなかった。

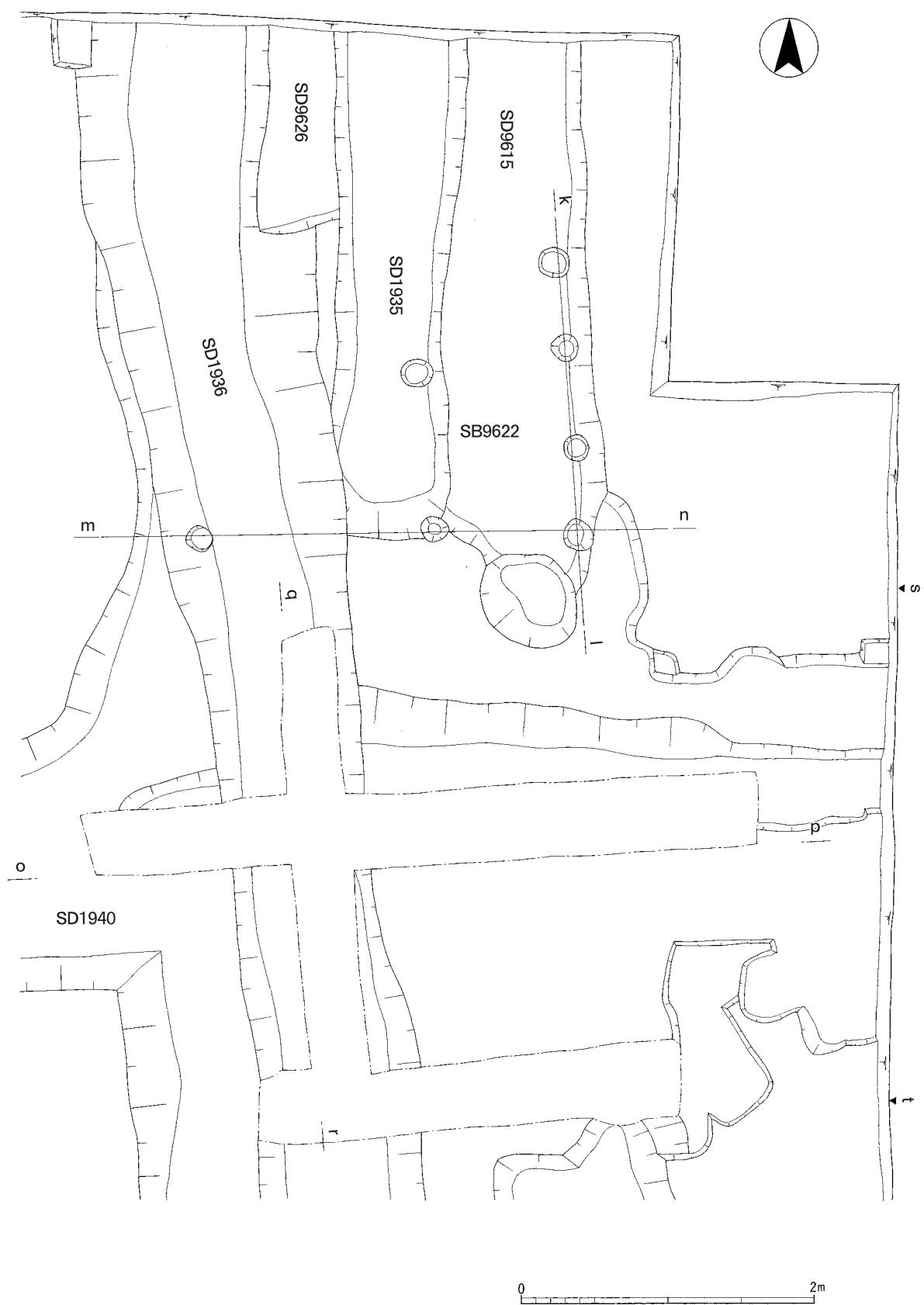
**S K 9623** 南区南東の南北 2 m ほどの楕円形で深さ約 0.2m の浅い土坑である。斎宮跡編年 II – 1 ~ 2 期の土器類の小片が出土している。

**S K 9624** S K 9623 の南に位置する長径 2.5m 前後、深さ 0.2m ほどの浅い落込み状の土坑で、SD 1936 に西肩部を壊されている。斎宮跡編年 II 期の磨耗した土器小片が出土している。

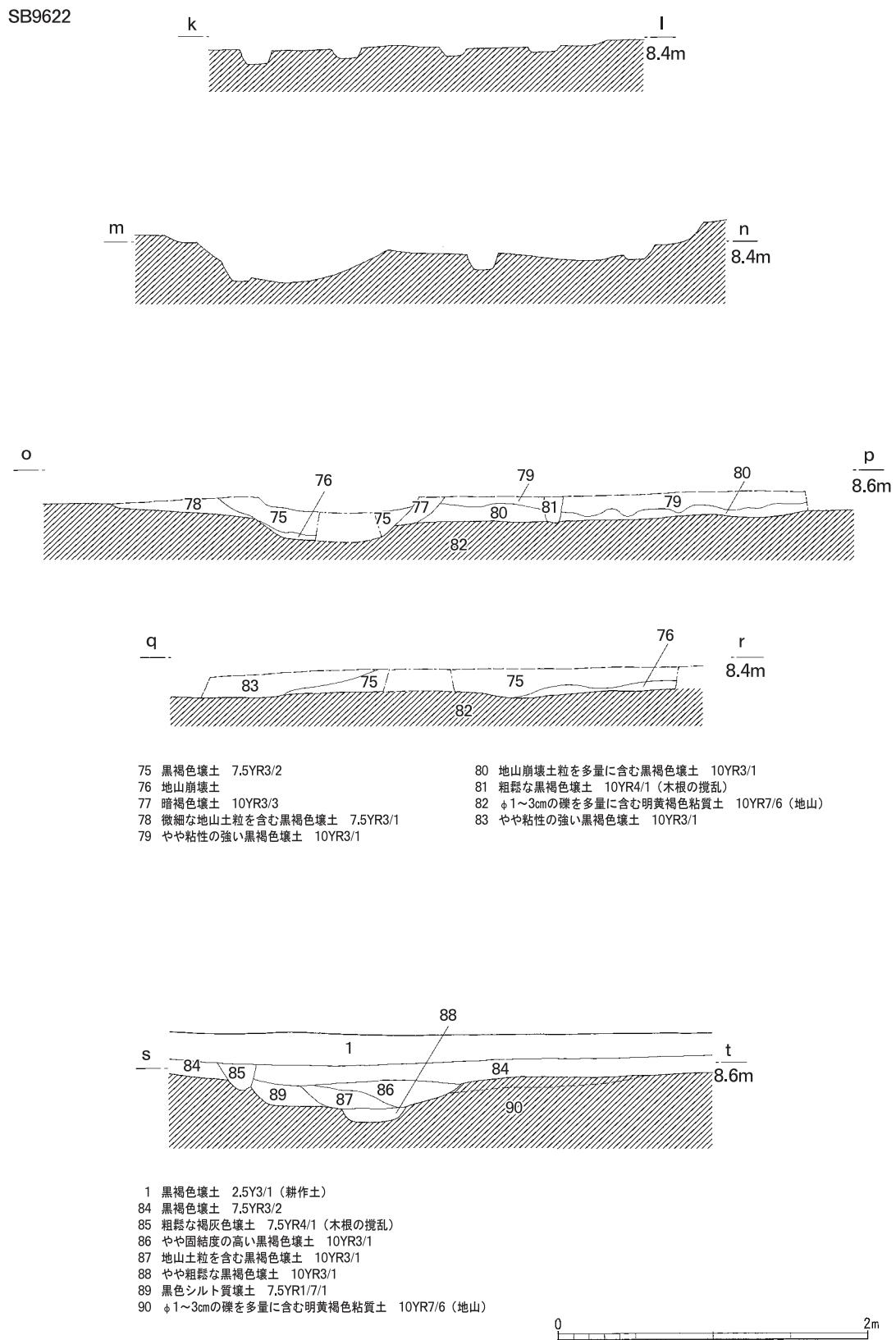
## (2) 斎宮 III 期以降の遺構

今回の調査区内では、III 期以降の遺構は大きく減少する。ある程度時期的な判断ができたものは溝 3 条あるのみである。

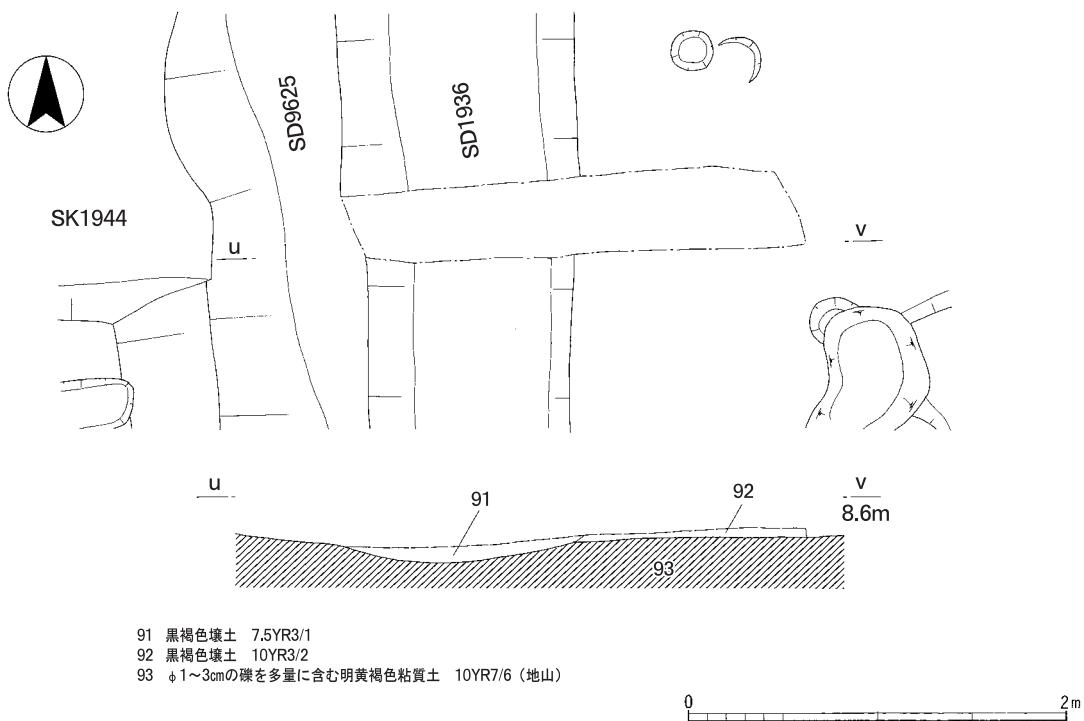
**S D 1943** 北区の西部から南区の中央部に連続する



第三-7図 第150次調査 SD 1935・1936・1940・9615・SB 9622 平面図 (1:40)



第三-8図 第150次調査 SB 9622断面図, SD 1936・1940 土層断面図 (1:40)



第三-9図 第150次調査 SD 1936 平面図・土層断面図 (1 : 40)

南北方向の溝である。北方の第57次調査ではこの延長を確認していないが、南方には南区の交差点部分を貫いて第40次調査まで延長が確認されている。遺構の断面がU字状で、第三-4図の断面図にみられるように二段階の掘削がみられる。北区では幅0.8~1.0m、深さ0.3~0.4m、南区で幅0.9~1.1m、深さ0.3mあまり一定していない。平面的にも直線ではなく、ゆるやかにカーブしたものとなる。溝底高でみてみると、南区南端で8.25m、北区北端で8.14m、北区南端で8.07mとわずかな差だが、北区の南側あたりで最も低くなっているものとみられる。斎宮跡編年でII期に属するものからロクロ土師器などIII-3期頃の土器片が少量出土している。最終的にはIII期でも後葉以降に埋没したものとみられる。

**SD 1936** 方格地割の南北区画道路の東側溝を壊すかたちで掘られた南北溝で、南はSD 1943同様第40次調査区まで延長しているが、北は第35次調査の6AGH-Dトレーニチを経て第57次調査区の北端まで続いている。今次調査の北区では第35次調査の再発掘を行ったにとどまったが、南区では新たに第35次調査の延長部分を確認した。南区では幅1.0~1.5mの断面U字形からカマボコ状~浅い弓状で、溝底高

をみると、北区で7.8m前後、南区北端で8.1m前後、南区南端で8.2m前後となっており北区に向かって流下する形状になっている。

SD 1936もまた平面形をみると緩やかに湾曲しており、それはSD 1943とほぼ平行したカーブを描き、遺構の規模・形状も類似している。こうした点からこの2条の溝も、II期の方格地割の南北道路SF 7350が変容して受け継がれたものとみることができる。溝心々間でみると道路幅は北区で約4.5m、南区で6.0m前後、南方の第40次調査区内で6~6.5m前後となっており、II期と比較するとほぼ半分の幅員となっている。この道路側溝も、今回の調査区内では確認できていないが、第35次調査では中世の陶器碗（山茶碗）も出土しており、III期の終わりから鎌倉時代にかけての時期に廃絶し、その後さらに、現在調査区の東に接して残る農道に変容していったことがうかがえる。

**SD 9617** 南区の中央を貫く南北溝で、幅1.3~1.5m、深さ0.3mほどの溝で断面形は逆台形である。埋土は粗鬆で、近世から近代にかけての瓦類や陶磁器類が出土しており、近世以降の土地境界を示すための溝であったと考えられる。

**SD 9625** 南区東部のSD 1936の西側に沿う南北溝である。埋土の重複関係からSD 1936に先行することが判断できる。Ⅱ期の磨耗の進んだ土師器・須恵器・灰釉陶器の小片が少量出土しているため、遺構掘削はⅡ期にまで遡る可能性はあるが、埋土の重複関係からSD 1935やSK 9623・9624よりは新しいと判断される。

### (3) 時期不明の遺構

第35次調査で調査され、遺構の重複関係など埋土から情報がないものや、出土遺物がないなど、特に時期決定ができなかったものである。

**SD 1951** 南区西部の幅約0.5m、深さ約0.1mの小規模な溝である。第35次調査の6AGH-Cトレーナーで確認されており、約20m分の延長が明らかになっているが、第150次調査南区の中央付近で南にいったんカーブして途切れている。磨耗の進んだ土師器・須恵器の小片が少量出土したのみである。SD 1940とは格段の規模の差はあるが、SF 7350がⅢ期以降、現代の農道にまで地割上には継続しているように、東西道路も同様に農道として地貌に存続していることから、道路側溝としての機能があったと想定される。

**SA 9619** 南区の西端、SD 1940の北側に接して確認した掘立柱列で、柱穴の直径は0.3mほどで、今回2間分確認した。柱間寸法は1.78mで6尺である。今回は柵列としているが、調査区の西側に延長し、側柱建物となる可能性もある。SD 1940と方向を揃えることからⅡ期頃の遺構とみられるが、出土遺物はなく、埋土の重複関係からはSD 1940より新しいものとみられるものの詳細な時期決定はできない。

**SB 9622** 南区北東部で、SD 1935・SD 9615に重なって確認された掘立柱群である。遺構検出の当初には確認できず、SD 9615埋土を調査する中で検出した（写真図版III-5参照）。

検出した7個の柱穴はいずれも直径0.2m前後の小規模なもので、残存する深さも0.05～0.1mと極めて浅い。南北列と東西列があるが、これらは直角に交わってはおらず、柱間寸法もバラつきがある。しかし南北列はSD 9615の東肩とよく揃っているため、これら道路側溝にともなう施設であると考えれば、橋ないしは護岸施設などに想定されるが、他の都城

の調査例にもみうけられず、現状では遺構の性格は不明といわざるを得ない。こうしたことからⅡ期の道路側溝に関わるものと考えるが、これも出土遺物もなく詳細な時期決定はできない。

**SD 1953** 南区でSD 1951の北で延長4.5m分を確認した。幅0.4m、深さ0.15m程度の小規模な溝である。

**SK 1939** 北区の南端の南北1.7m、深さ0.25mの略方形の土坑である。土師器・須恵器の小片が出土している。

**SK 1942** 南区の中央付近の南北2.0m、深さ0.3mの方形の土坑である。出土遺物はない。

**SK 1952** 南区西部の複数の不整形土坑が集まった形状のものである。樹木の根の痕跡とみられる。

**SK 9620** 南区の中央付近の、南北2.0m、東西1.6m以上、深さ0.2mの不整形の土坑である。出土遺物はないが、遺構埋土の断面観察からはⅢ期のSD 1943よりは古いことが判断できる。

## 4 出土遺物

第150次調査では当初から道路遺構が想定される箇所での調査でもあり、出土遺物は整理箱で20箱であった。第150次調査区は第35次調査の6AGH-D・6AGH-Cトレーナーと重複しており、こちらの遺物も未報告であるため、SD 1935・SK 1938についてあわせて報告する。

### (1) SD 3705の出土遺物

土師器杯A・皿A・高杯・甕A・甕C（長胴甕）・鍋B（把手付鍋）と須恵器杯が小片で出土している。今回確認している遺構の中では、最も古相の土器群である。土師器杯A（1・2）は口縁部をヨコナデし、体部をナデ調整する斎宮跡の土器編年でⅡ-1期の形式のものだが、（3）は胎土が緻密で器壁もやや厚く、I-4期まで遡る可能性もある。高杯（4）は精良な胎土を用い、杯部の内面に放射・螺旋状暗文を施す。土師器甕Aは口径20cm程度のやや小型のものから約27cmの大型のものまであるが、全体を復原できるものはない。甕C（8）は直径34.4cmに復原されるやや大型のものである。

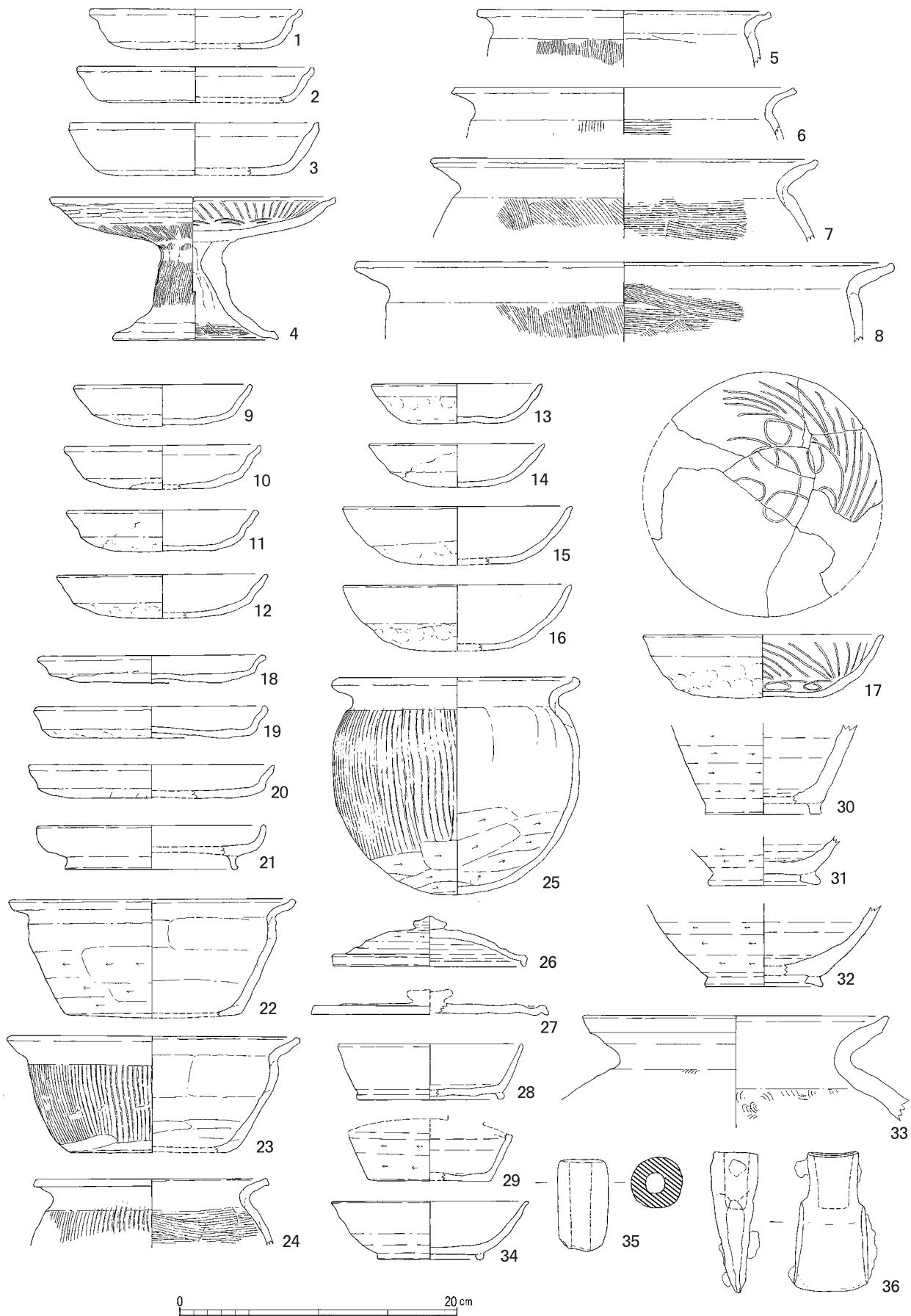
鉄斧（36）は全長10.0cm、刃部最大幅5.3cm、最大厚3.4cmで刃部と袋部が別造りで接合される。径

第三一表 第150次調査 遺構一覧表

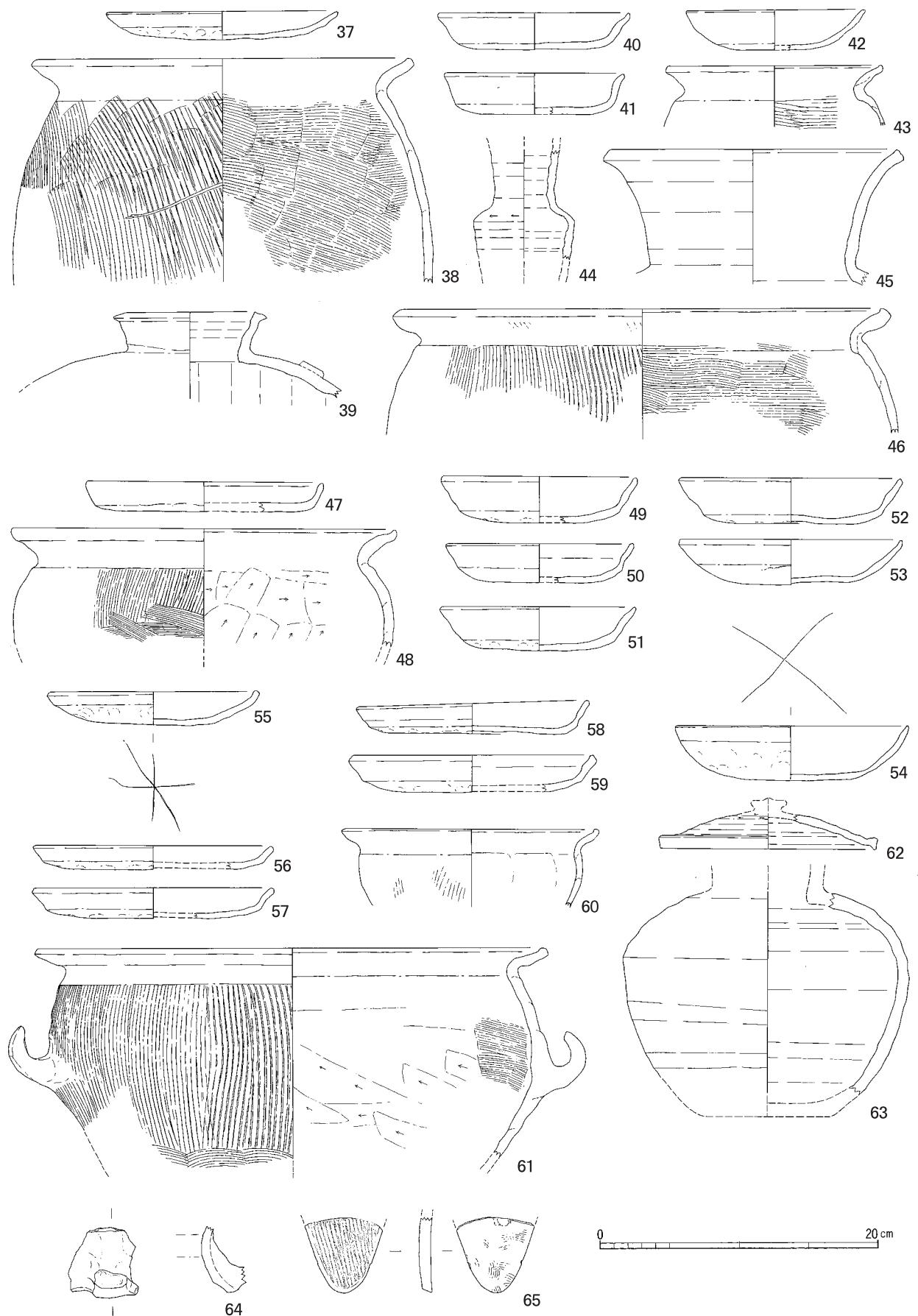
通番遺構名	遺構の種別	調査時遺構名	グリッド	時期	出土遺物・その他備考
S D 1935	溝	溝11・溝18 (35次:SD1)	s 17・t 23 (35次6AGH-D:A~G)	~II-2	土師器:杯・皿・高杯・甕・竈片 須恵器:杯・甕片 灰釉陶器:椀
S D 1936	溝	溝7・溝5 (35次6AGH-D:SD2)	s 23・t 23・t 24・t 25・t 01 (35次6AGH-D:A~L:N13)	III	土師器:皿・甕 須恵器:甕片
S K 1937	土坑	(35次6AGH-D:SK3)	(35次6AGH-D:E)	II-2	土師器:杯・椀・高杯・鉢・甕・長胴甕 須恵器:杯B・壺・甕 黑色土器A:杯 灰釉陶器:椀 製塙土器
S K 1938	土坑	土坑8 (35次6AGH-D:SK3)	r 16 (35次6AGH-D:F)	II-2	土師器:杯・椀・皿・鍋・把手付鍋 須恵器:杯蓋・壺
S K 1939	土坑	(35次6AGH-D:SK3)	(35次6AGH-D:G)	不明	土師器:甕小片 須恵器:甕片
S D 1940	溝	溝10・溝16 (35次6AGH-D:SD1)	o 24・p 24・q 24・r 24・s 24・t 24 (35次6AGH-D:M)	II-1~2	土師器:杯・椀・皿・把手付鍋・甕・長胴甕 須恵器:蓋・壺 G・甕
S K 1942	土坑	(35次6ADH-D:SK1)	(35次6AGH-D:N11)	不明	なし
S D 1943	溝	溝1 (35次6ADH-D:SD2)	r 23・r 24・r 25・r 01 (35次6AGH-D:D:O:N11)	III-1~3	土師器:小片 ロクロ土師器:杯 須恵器:甕片
S K 1944	土坑	(35次6ADH-D:S1)	(35次6AGH-D:D:O:N12)	II	土師器:杯・皿・把手付鍋・甕 須恵器:杯・蓋・壺・甕
S D 1951	溝	(35次6AGH-C:SD2)	(35次6AGH-C:N11)	不明	土師器:杯片 須恵器:甕片
S K 1952	土坑	(35次6AGH-C:SK1)	(35次6AGH-C:8)	不明	土師器:杯・把手付鍋 須恵器:甕片
S D 1953	溝	—	p 25・q 24・q 25	不明	なし
S D 3705	溝	溝13	p 23・p 24	II-1~2	土師器:杯・椀・皿・高杯・把手付鍋・甕・長胴甕 須恵器:杯
S D 9615	溝	溝9・溝19	s 16・t 16・s 17・t 17・t 23・t 24	~II-2	土師器:杯・椀・皿・甕・長胴甕 須恵器:甕片・俵瓶
S K 9616	土坑	土坑1	p 23	II-1~2	土師器:皿・高杯・鍋
S D 9617	溝	溝5	q 23・q 24・q 25・q 1	近世~近代	土師器:杯・皿・甕 須恵器:杯・甕片 陶器:椀(山茶椀)・小皿(山皿) 磁器:椀 瓦片
S K 9618	土坑	土坑7	q 23	II?	土師器:小片
S K 9620	土坑	—	r 24・r 25	不明	なし
S D 9621	溝	溝3	r 25・r 1	不明	土師器:小片
S K 9623	土坑	土坑2	t 1	II-1~2	土師器:椀・皿・高杯・甕 須恵器:捏鉢・甕片
S K 9624	土坑	土坑3・4	t 1	II~	土師器:杯・壺E?・甕
S D 9625	溝	溝8	s 24・s 25・s 1・t 1	II?~III	土師器:杯・皿・高杯・把手付鍋 須恵器:壺・甕 灰釉陶器:椀
S D 9626	溝	—	t 23	~II-2	なし

第三二表 第150次調査 堀立柱建物一覧表

遺構番号	グリッド	建物時期	規模 間(m)×間(m)	柱間寸法	主軸	方位 (N基準)	備考
S A 9619	O24	不明	2(3.56)	1.78	東西	N84° 30'E	
S B 9622	S23・T23	不明	2(2.55)×3(1.87)	南北:0.59~0.69~0.59 東西:1.59~0.96	東西?	南北:N4° W 東西:N91° 30'E	橋か?



第三-10図 第150次調査 出土遺物実測図(1)(1:4)



第三-11図 第150次調査 出土遺物実測図(2) (1:4)

第III-3表 第150次調査 出土遺物観察表(1)

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎 土	焼成	色調	残存度	備 考	登録番号
1	土師器	杯A	S D3705	口径 器高 2.9	15.2 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	橙5YR6/6	口径の1/4		006-02
2	土師器	杯A	S D3705	口径 器高 2.6	16.8 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	口径の1/6		006-04
3	土師器	杯A	S D3705	口径 器高 3.8	17.8 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	緻密	良	橙5YR6/6	口径の1/6		006-03
4	土師器	高杯	S D3705	口径 脚部径 器高 10.3	20.4 20.4 11.6 11.6 10.3 杯部外面ヘラミガキ、内面放射・螺旋状暗文、脚部外面タテハケ・ヨコナデ、内面ヨコハケ・ナデ	精良	良	橙5YR6/6	全体の約70%		006-01
5	土師器	甕A	S D3705	口径 20.8	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヘラケズリ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4		006-06
6	土師器	甕A	S D3705	口径 24.2	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヨコハケ	緻密	良	橙5YR6/8	口径の1/4		006-05
7	土師器	甕C	S D3705	口径 27.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4		007-02
8	土師器	甕C	S D3705	口径 34.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	口径の1/4		007-01
9	土師器	杯A	S D1935	口径 器高 3.0	12.6 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/6	ほぼ完存	35次出土	012-05
10	土師器	杯A	S D1935	口径 器高 3.1	14.0 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明赤褐5YR5/6 ～褐灰10YR4/1	約40%	35次出土 粘土接合痕残る	011-01
11	土師器	杯A	S D1935	口径 器高 3.0	13.5 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/8	約50%	35次出土 粘土接合痕残る	011-02
12	土師器	杯A	S D1935	口径 器高 3.1	15.2 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	赤褐5YR4/8	約40%	35次出土	011-04
13	土師器	椀A	S D1935	口径 器高 2.9	12.2 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙7.5YR6/6	約50%	35次出土	011-05
14	土師器	椀A	S D1935	口径 器高 3.1	12.4 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明赤褐5YR5/6	約40%	35次出土 粘土接合痕残る	011-03
15	土師器	椀A	S D1935	口径 器高 4.3	16.4 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明赤褐5YR5/6	約70%	35次出土	011-06
16	土師器	椀A	S D1935	口径 器高 4.7	16.3 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明赤褐5YR5/6	口径の1/4	35次出土 粘土接合痕残る	011-07
17	土師器	椀A	S D1935	口径 器高 4.5	17.2 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ内面に放射・螺旋状暗文	密	良	灰褐7.5YR4/2 ～橙5YR6/6	約70%	35次出土	012-06
18	土師器	皿A	S D1935	口径 器高 2.0	16.0 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細なクシリ 疊含む	良	橙5YR6/6	約50%	35次出土 粘土接合痕残る	014-02
19	土師器	皿A	S D1935	口径 器高 2.3	16.4 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/6	ほぼ完存	35次出土	014-01
20	土師器	皿A	S D1935	口径 器高 2.4	17.6 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	並	良	橙5YR6/6	口径の1/8	器表面の磨耗すすむ	005-02
21	土師器	皿B	S D1935	口径 台径 器高 3.1	16.2 12.2 口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ貼付高台	密	良	橙5YR6/6	口径の1/4	35次出土	014-03
22	土師器	鉢	S D1935	口径 器高 8.4	20.5 口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・ヘラケズリ、内面ナデ	密	良	明赤褐5YR5/6	口径の1/2	35次出土	014-05
23	土師器	鉢	S D1935	口径 器高 11.6	20.5 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラケズリ、内面ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	全体の約40%	35次出土	014-05
24	土師器	甕A	S D1935	口径 16.6	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4	35次出土	013-02
25	土師器	甕A	S D1935	口径 器高 15.5	17.0 口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ・ヘラケズリ、内面ナデ・ヘラケズリ	微細な砂粒を多量に含む	良	外：にぶい橙5YR6/3 ～黒10YR2/1 内：灰黃橙10YR5/2	約50%	35次出土 外面にスス付着、内面に黒色物付着	013-01
26	須恵器	蓋	S D1935	口径 器高 3.7	13.6 体部ロクロナデ、上面ロクロケズリ宝珠つまみ貼付	φ1mm弱の白色粒含む	良	灰N5/	約40%	35次出土	012-02
27	須恵器	蓋	S D1935	口径 16.8	体部ロクロナデ、内面ナデ	密	良	黄灰2.5Y6/1	約40%	35次出土 転用硯の可能性あり	012-03
28	須恵器	杯B	S D1935	口径 台径 器高 4.0	13.1 10.2 体部ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	密	軟調	外：灰5Y6/1 ～灰10Y4/1 内：灰黄7.5Y6/1	台径の1/4	器表面の磨耗すすむ	005-01
29	須恵器	平瓶	S D1935	底径 8.8	8.8 体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ	微細な白色粒含む	良	外：灰N6/ 内：灰白5Y7/1	体部の50%	35次出土	012-04
30	須恵器	壺	S D1935	台径 8.4	8.4 体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ、貼付高台	密	良	灰5Y6/1	台径の1/4	35次出土	013-04
31	須恵器	壺	S D1935	台径 7.8	7.8 体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ、貼付高台	密	良	外：灰5Y5/1 内：灰5Y6/1	台径の4/5	35次出土	013-05
32	須恵器	壺	S D1935	台径 8.5	8.5 体部外面ロクロケズリ、内面ロクロナデ、底部外面ナデ、貼付高台	密	良	外：褐灰7.5YR4/1 内：灰黄2.5YR6/2	台径の1/2	35次出土	013-03
33	須恵器	甕	S D1935	口径 21.8	口縁部ロクロナデ、体部内面同心円タタキ、内面に平行タタキ残る	微細な白色粒含む	良	外：灰5Y4/1 内：灰白5Y7/1	口径の1/2		005-03

第三一四表 第150次調査 出土遺物観察表(2)

番号	器種	器形	地区・遺構	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎 土	焼成	色調	残存度	備 考	登録番号	
34	灰釉陶器	椀	S D1935	口径 台径 器高	14.2 7.6 4.2	体部クロナデ、外面クロケズリ貼付高台、灰釉ハケ塗り	微細な黒色粒の溶融がみられる	良	釉:灰黄2.5Y6/2 ～オリーブ黄5Y6/3 素地:白灰5Y7/1	約40%	35次出土	012-01
35	土製品	土錐	S D1935	長 幅	6.7 3.6	全面ナデ、孔径1.9cm	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	全体の2/3	35次出土 表面の磨耗すすむ	014-04
36	鉄製品	鉄斧	S D1935	長 幅	10.0 3.4	—	—	—	—	ほぼ完存		015-01
37	土師器	皿A	S D9615	口径 器高	16.2 2.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	にぶい赤褐5YR5/4	約70%		004-02
38	土師器	甕C	S D9615	口径	26.6	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヨコハケ	密	良	外: 黒褐10YR3/1 内: にぶい黄橙10YR7/3	口径の1/4	体部外面に沈線	004-03
39	須恵器	横瓶	S D9615	口径	11.0	口縁部ヨコナデ、体部ロクロナデ	黒色粒の溶融みられる	良	外; 灰7.5Y5/1 内: 灰N5/	口頸部のみ残存	肩部に重ね焼きの融着	008-06
40	土師器	杯A	S D1940	口径 器高	13.6 2.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	微細な砂粒多量に含む	良	明赤褐5YR5/6	約40%		008-02
41	土師器	杯A	S D1940	口径 器高	12.8 3.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	わずかにクサリ礫含む	良	橙5YR6/8	口径の1/4		008-04
42	土師器	椀A	S D1940	口径 器高	12.7 2.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	良	橙5YR6/8	口径の1/4	器表面の磨耗すすむ	008-05
43	土師器	甕A	S D1940	口径	15.2	口縁部ヨコナデ、体部内面ヨコハケ外面不明	微細な砂粒を多量に含む	良	外: にぶい黄橙10YR7/4 内: 褐灰10YR4/1	口径の1/6	外面の剥離すすむ	008-03
44	須恵器	壺G	S D1940	最大幅	7.2	体部ロクロナデ	黒色粒の溶融みられる	良	外: 灰10Y5/1 内: 灰白7.5Y7/1	肩部径の1/2		008-01
45	須恵器	甕A	S D1940	口径	20.6	口縁部ロクロナデ	微細な白色粒含む	良	外: 灰10Y4/1 内: 灰N4/	口径の1/4		005-04
46	土師器	甕C	S D1940	口径	34.4	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	口径の1/4		007-03
47	土師器	皿A	S K9616	口径 器高	16.8 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	橙7.5YR6/6	約40%		010-02
48	土師器	鍋A	S K9616	口径	27.2	口縁部ヨコナデ、体部外面上半タテハケ下半ヨコハケ、内面ヘラケズリ	微細な砂粒を多量に含む	やや軟調	浅黄2.5Y7/3	口径の1/6		010-01
49	土師器	杯A	S K1938	口径 器高	13.8 3.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/6	約40%		003-04
50	土師器	杯A	S K1938	口径 器高	13.3 2.8	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	やや軟調	橙7.5YR7/6	約50%	器表面の磨耗すすむ	001-02
51	土師器	杯A	S K1938	口径 器高	13.8 3.1	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	クサリ礫を多量に含む	良	明赤褐5YR5/8	約90%	35次出土	003-02
52	土師器	杯A	S K1938	口径 器高	15.7 3.3	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/8	約70%	35次出土、底部に成形時の板目残る	003-03
53	土師器	杯A	S K1938	口径 器高	15.9 3.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細な砂粒を多量に含む	やや軟調	橙7.5YR6/6	口径の1/6	器表面の磨耗すすむ	004-01
54	土師器	椀A	S K1938	口径 器高	16.4 3.9	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR7/8	約90%	一部35次出土 内面に「×」の線刻	001-01
55	土師器	皿A	S K1938	口径 器高	15.2 2.5	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明赤褐5YR5/6	ほぼ完存	底部外面に「*」の線刻	009-01
56	土師器	皿A	S K1938	口径 器高	17.2 1.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細なクサリ礫含む	良	橙7.5YR7/6	口径の1/4		001-03
57	土師器	皿A	S K1938	口径 器高	17.0 2.2	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	橙5YR6/8 ～灰褐7.5YR4/2	約30%	35次出土	003-06
58	土師器	皿A	S K1938	口径 器高	16.4 2.4	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	微細なクサリ礫含む	良	橙5YR6/6	約90%	35次出土 器表面の磨耗すすむ	003-05
59	土師器	皿A	S K1938	口径 器高	17.2 2.7	口縁部ヨコナデ、体部ナデ・オサエ	密	良	明赤褐2.5YR5/6	口径の1/6	35次出土	003-07
60	土師器	鍋A	S K1938	口径	18.0	口縁部ヨコナデ、体部外面タテハケ内面ナデ	密	良	橙5YR6/8	口径の1/4	35次出土	003-08
61	土師器	鍋B	S K1938	口径	36.2	口縁部ヨコナデ、体部外面上半タテハケ・下半ヨコハケ、内面ヘラケズリと一部ヨコハケ	微細な砂粒を多量に含む	良	にぶい黄橙10YR7/4	約50%	35次出土	002-01
62	須恵器	蓋	S K1938	口径	15.2	体部ロクロナデ、外面頂部ロクロケズリ	密	良	にぶい橙7.5YR6/4 ～灰黄褐10YR5/2	口径の1/4	35次出土	003-01
63	須恵器	壺	S K1938	胴径	20.4	体部ロクロナデ、外面底部付近ロクロケズリ	密	良	外: 灰7.5Y5/1 内: 灰N6/	約40%	肩部に自然降灰の痕跡	001-04
64	須恵器	円面覗?	包含層	残長	5.0	内外面ナデ、一部ケズリ	密	良	灰5Y6/1	—	獸脚覗?	009-03
65	須恵器	猿面覗	包含層	残長	5.4	端部研磨、外面に平行タタキ目、内面に同心円タタキ目残る	密	良	外: 灰黄2.5Y6/2 内: 灰5Y6/1	約1/3		009-02

2.8cm×1.8cm、深さ4.1cmの袋部に木質の痕跡が残る。刃部は鍛造だが、袋部は鋳造とみられる。

## (2) SD 1935 の出土遺物

大部分は第35次調査の際に出土している。土師器杯A・椀A・皿A・皿B・高杯・平底鉢・甕A・竈、須恵器杯A蓋・杯B・壺L・平瓶・甕A、灰釉陶器椀、製塩土器、土錐が出土した。第35次調査区内の出土遺物にはわずかに中世の陶器椀(山茶椀)もみられるが、重複するSD 1936などからの混入と考えられ、土師器供膳具類にみられるように斎宮跡編年II-2期の形式の大型の破片のものが主体となっており、一部II-1期のものも含むが最終的な溝の廃絶がII-2期頃であったとみていいだろう。これら土師器供膳具には粘土板の接合痕が残るものも多い(10・11・14・16・18)。また皿A(20)には成形時のものとみられる板目の圧痕が底部外面に残る。皿B(21)は斎宮跡ではあまり出土量は多くない器種である。土師器平底鉢も同様だが、ほぼ同一のサイズで外面を板ナデ調整するもの(22)と、ハケメやヘラケズリで調整するもの(23)の2種類がみられる。

須恵器・灰釉陶器はおおむね東海地方の生産地の編年で黒窓14号窯式期のもので年代観のうえでも齟齬はない。

## (3) SD 1940 の出土遺物

整理箱で1箱分の出土量があり、土師器杯A・皿A・鍋B・甕A・甕C、須恵器杯蓋・壺G・横瓶・甕Aが出土しているが、細かく破碎したものが多く、図化に耐えるものは少ない。

土師器杯A(41)のように、I-4~II-1期の形式のものから、II-2~3期の皿A(37)があり、出土土器の形式差は大きい。方格地割の区画道路側溝ながら、遺構の重複関係上SD 3705より新しいという状況とも整合する。

土師器甕C(38)には胴部に棒状の工具で沈線が1条線刻されている。須恵器横瓶(39)もあまり類例のみない。肩部に焼成時の融着が残る。須恵器壺G(44)は斎宮跡ではこれまで数例しか報告されておらず、細片ながら注目される。

## (4) SK 9616 の出土遺物

SD 3705に重複する浅い土坑で、土師器皿A・高

杯・鍋の破片が出土しているが、細片が多くSD 3705埋土のものが混入している可能性も高い。時期的にもII-2期の形式のものに限られるようである。

## (5) SK 1938 の出土遺物

北区で方格地割の区画道路SF 7350上に掘られた浅い土坑だが、第35次調査時のものとあわせて、整理箱で約1.5箱分の土器類が出土している。

土師器杯A・椀A・皿A・鍋A・鍋B、須恵器杯A蓋・壺が完形ないし大型の破片で出土している。第35次調査分の出土状況は分からぬが、第150次調査の際には重なりあった状態で出土しているが、意図的に埋設したような状況はうかがえない。時期的には斎宮跡編年のII-2期に属する形式のものばかりで、土坑の形状から複数回の廃棄があった可能性もあるが土器形式としては一括性は高いものと考えられる。今回は図示していないが、隣接するSK 1937同様、区画道路上に器物を廃棄しているが、土坑の規模や、SK 1937には製塩土器があるなど、若干の性格・意図の差はあるのかもしれない。

(54・55)はそれぞれの内底面、外底面に細い線刻で「×」ないし「\*」を記す。

## (6) その他の出土遺物

(64)はやや砂質分の多い陶質のもので、壺などの把手部分の可能性もあるが、内面の一部を丁寧にヘラケズリしており、形態は不明である。

(65)は須恵器の猿面硯の一部で、須恵器の甕腹の破片を丁寧に面取りして隅丸の二等辺三角形に仕上げている。外面には細い平行タタキ目が、内面には硯面として使用しているため磨耗しているが細かい同心円タタキ目が残る。

## 5 まとめ

これまでみてきたように、第150次調査では、史跡東部に造営された方格地割の区画道路交差点のひとつを、これまでなく良好な状態で確認できた。今回のこの成果を整理するとともに、方格地割の設計等について検討してみたい。

### (1) 交差点の形状

今回確認した交差点では、まず方格地割造営当初に近い時期の遺構をみると、東西道路SF 7350の側溝は北側溝SD 1940が重複関係や出土土器から埋土

が若干新しいと判断されるものの、交差点を横断していることが再度確認できた一方で、南北道路 S F 6009 の東西の側溝 S D 3705 と S D 9626・1935 は交差点手前で浅くなり、交差点を貫通していないことを確認した。斎宮跡の発掘調査では、これまでに 8 箇所の方格地割の交差点付近の調査例があるが、第 93 次調査で底部に鋤先のような土木具の痕跡が残り、掘削後すぐに埋め戻されたと考えられる南北溝（側溝？）がみられる以外は、方格地割當初から、少なくとも斎宮跡編年の II-1～2 期頃にかけては長岡京でも報告されているような、東西方向が優先する形状の交差点が卓越することが判明した。

溝の排水機能についてはどうだろうか。溝底部高をみると、東西道路の北側溝 S D 1940 は近隣の調査区もあわせてみると、第 35 次調査 6 A G H-C トレンチの西端で約 8.1m、第 150 次調査南区西端で 8.2m、同中央付近で 8.3～8.34m、同東端で 8.25m、第 35 次調査 6 A G I-A トレンチの西端から 16m ほどの箇所で 8.15m、さらに第 150 次調査区の東方約 65m の第 64-7 次調査で 7.8～7.9m となっている。マクロ的にみれば斎宮の基盤地形にあわせて西から東に傾斜しているが、ミクロ的には今回調査の交差点付近から東と西に排水は振り分けていたようにも見える。一方、西側溝 S D 3705 は第 57 次調査の北端付近で約 8.3m、同南端で約 8.2m、第 150 次調査南区北端で約 8.2m、溝の南端でも溝底が一段上がる手前で約 8.2m で大きな高低差はない。東側溝の S D 1935 は第 57 次調査北端で約 8.2m、同南端で 8.1m、第 35 次調査 6 A G H-D トレンチの北端から 11m ほどのところが最も低く 8.05m、第 150 次調査北区で約 8.1m、南区で約 8.1m で、これもあまり大きな高低差はない。S D 9626 でも第 150 次調査南区で約 8.2m である。このように溝底高の高低差と溝の流断面の規模から、基本的には東西溝の方が排水機能的に優位になっていることは改めて確認できる。このことは方格地割全体の設計思想にも関わる事であり、さらに広域に分析していく必要があるだろう。

## （2）方格地割の設計

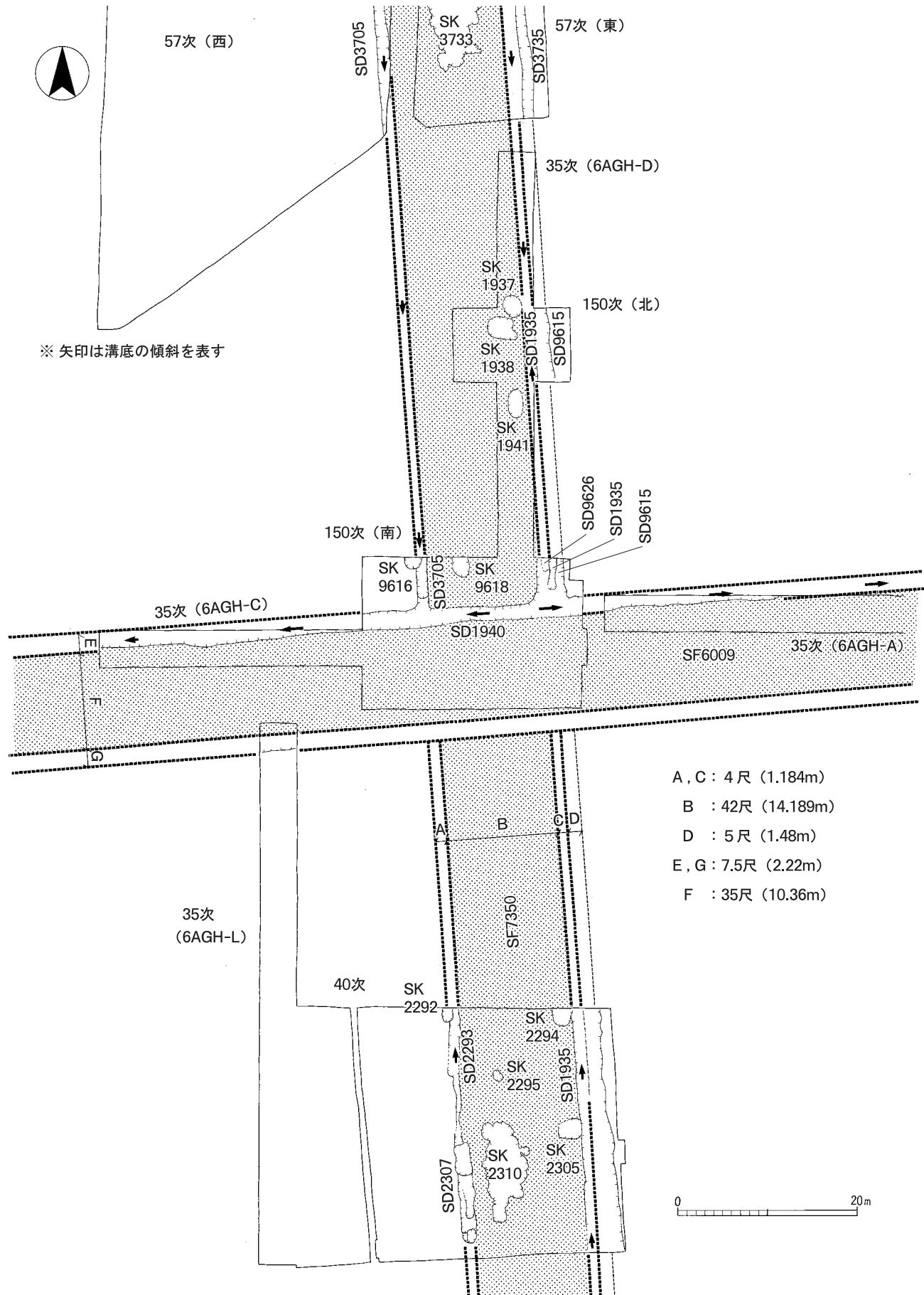
今回の調査区からみてとれる方格地割の設計プランはどうだろうか。従来方格地割は各道路側溝の心々間で約 12m あり、これにより一辺約 120m (400 尺)

の方形区画を集積する地割とされてきた。これに対しては近年いくつかの設計プランについての試案が提示されているが、先に遺構の報告の中でもふれたように、最も古い東側溝 S D 9626 に対し、西側溝 S D 3705 がほぼ方格地割當初の位置と規模を保っているとみると、溝心々間で 13.8m (46.6 尺) となる。また溝の内側の肩々間では 12.7m (約 43 尺) 一方この二つの溝の外側の肩々間の幅では (S D 9626 については溝底の形状からの復元によるが) 14.9m (50 尺) というまとまりのよい数値が得られた。第 150 次調査では東西道路 S F 6009 の南側溝は直接は確認していないものの、直近の第 35 次調査 6 A G H-L トレンチ北端の重複する溝により、同様に 50 尺の幅の道路計画を想定することに齟齬はなく、また今回の調査の西方約 220m の第 86 次調査で同様の復原もなされている。もちろん、一箇所の交差点とそこで交差する道路だけで方格地割全体の設計を云々するのは危険であるし、設計と施工の誤差も前提としなければならないだろうが、区画道路の設計にあたって、計画道路幅の存在の可能性を今回の調査成果の中から提示しておきたい。

## （3）方格地割の造営時期と衰退の状況

最古とみなされる S D 9626 からは出土遺物を得ることはできなかったが、S D 3705・1935・1940 からは斎宮跡編年で II-1・2 期の土器類が出土している。

史跡東部では斎宮跡編年の I-4 期には鍛冶山地区での内院の造営が始まっており、それを『続日本紀』記載の宝亀 2 (771) 年 11 月 18 日条の記載より酒人内親王の発遣に先立つ氣太王による斎宮造営にあてることは現在ほぼ定説となっているが、今回の調査で検出した区画道路側溝からは I-4 期の遺物は含まれていない。また、詳細な再検討が必要なもの、東加座地区周辺のこれまでの調査で I-4 期の建物遺構が確認されたのは東加座北①区画の第 75 次調査掘立柱建物と竪穴建物各 1 棟、東加座南①区画の第 77 次調査の掘立柱建物 1 棟、東加座北②区画の第 66・79 次の掘立柱建物 10 棟と竪穴建物 6 棟、東加座南②区画の第 62 次調査で掘立柱建物 6 棟、第 69 次調査では掘立柱建物 5 棟、鍛冶山東区画では第 48-11 次調査で掘立柱建物 6 棟、竪穴建物 2 棟が報



第III-12図 第150次調査 方格地割道路交差点模式図 (1:600)

告されている。このように竪穴建物が伴う場合が多く、一般に官衙的なエリアを想定しがたいことと、一部の報文の中でも述べられているが、竪穴建物や土坑に比べて掘立柱建物は出土遺物の僅少さから時期決定に誤差が生まれやすいこと、かつての調査では奈良時代後期から平安時代初期にかけての土器の編年観にブレがあることなどから、厳密にⅠ－4期とできる建物は再検討により減少するとみられ、当該期のものと見られる建物も「斎宮」との直接的関係の上でも要検討であるといえるだろう。

このような点からも史跡の東限にも及ぶ方格地割の造営はⅠ－4期には遡らず、桓武朝期にほぼ相当するⅡ－1期に求められ、光仁朝と同様に『続日本紀』延暦4（785）年4月23日記載の朝原内親王の群行に先立つ紀朝臣作良の造斎宮長官任命をもってあてる事がやはり妥当であろう。

次に方格地割の変遷と衰退についてみてみると、SD 1935 出土土器は、第35次調査によるものが多く詳細な出土状況の記録がないが、Ⅱ－2期の大型の破片が多く、器表面の磨耗も少ないとから流入ではなく廃棄にともない埋没したものとみられる。他にもSD 3705もⅡ－2期には、SD 1940も遅くともⅡ－3期には埋没したとみられる。また、SK 1937・1938など道路上に掘削され、Ⅱ－2期のまとまった土器類などが出土した土坑も、SF 7350の道路としての機能低下を示すものである。この画期ともいえるⅡ－2期は斎宮跡編年の実年代観で820～850年頃にあてており、ここから天長元（824）年の度会斎宮（現伊勢市小俣町の離宮院）への移転という事件が想起される。この後承和6（839）年に度会斎宮の火災<sup>(2)</sup>という事件を経て、斎宮が戻るまで多気の当地では斎宮の空白期間が生じるが、その移転に関連してSD 1935やSK 1937・1938などへの器物の廃棄が行われたのではないだろうか。

Ⅱ－2期以後、少なくともⅢ期の間には南北道路SF 7350は西側溝SD 1943・東側溝SD 1936により存続が確認される。しかしこれは道路の幅が溝心々間で4.5～6.5mと一定しない上、線形も直線的にはならず、緩やかにカーブしたものになっている。またこの時期の道路は第150次調査南区の交差点部分においても貫通しており、Ⅱ期とは異なった様相を

呈している。一方東西道路SF 6009は、SD 1951に側溝としての機能を想定できるかもしれないが、南北道路に対して明らかに形骸化ないしは衰退が進んでいたとみられる。今回の調査では鎌倉時代の遺構は確認していないが、これ以後南北・東西それぞれの道路は幅2m程度の農道として、かつての遺制を伝えるのみの状態となっていた様子もうかがえる。

今回の第150次調査は500m<sup>2</sup>程度の調査ながら、斎宮方格地割の交差点をこれまでの調査事例と比べても良好な状態で確認することができた。一方これにより方格地割について実態把握について基礎的な部分にも多くの検討課題が残ることが一層明らかになったと言える。今回の調査データはこうした検討のための良好な基準となりうるものであり、より広範な比較検討を進めていきたい。

（大川勝宏）

#### ＜註＞

- (1) 例えば下記のようなものがある。
  - ・田阪仁・泉雄二「国史跡斎宮跡の最新成果から—史跡東部の区画造営プランをめぐって—」『古代文化第43巻第4号』1991
  - ・大川勝宏「光仁・桓武朝の斎宮一方格地割形成に見る斎宮の変革—『古代文化第49巻第11号』1997
  - ・山中章「斎宮の交通体系 方格地割交差点の優先関係」『（財）向日市埋蔵文化財センター年報 都城10』1999
  - ・大川勝宏「第六章内院地区の遺構変遷」『斎宮跡発掘調査報告I』斎宮歴史博物館 2001
  - ・山中章「斎宮方格地割の設計」『条里制・古代都市研究十七』2001
  - ・井上和人「斎宮方格地割研究への提言—再検討への第一歩—」『斎宮歴史博物館研究紀要十二』2003
- (2) 『類聚国史』天長元年九月十日条
- (3) 『続日本後記』承和六年十二月二日条



調査区全景（北から）



北区全景（東から）



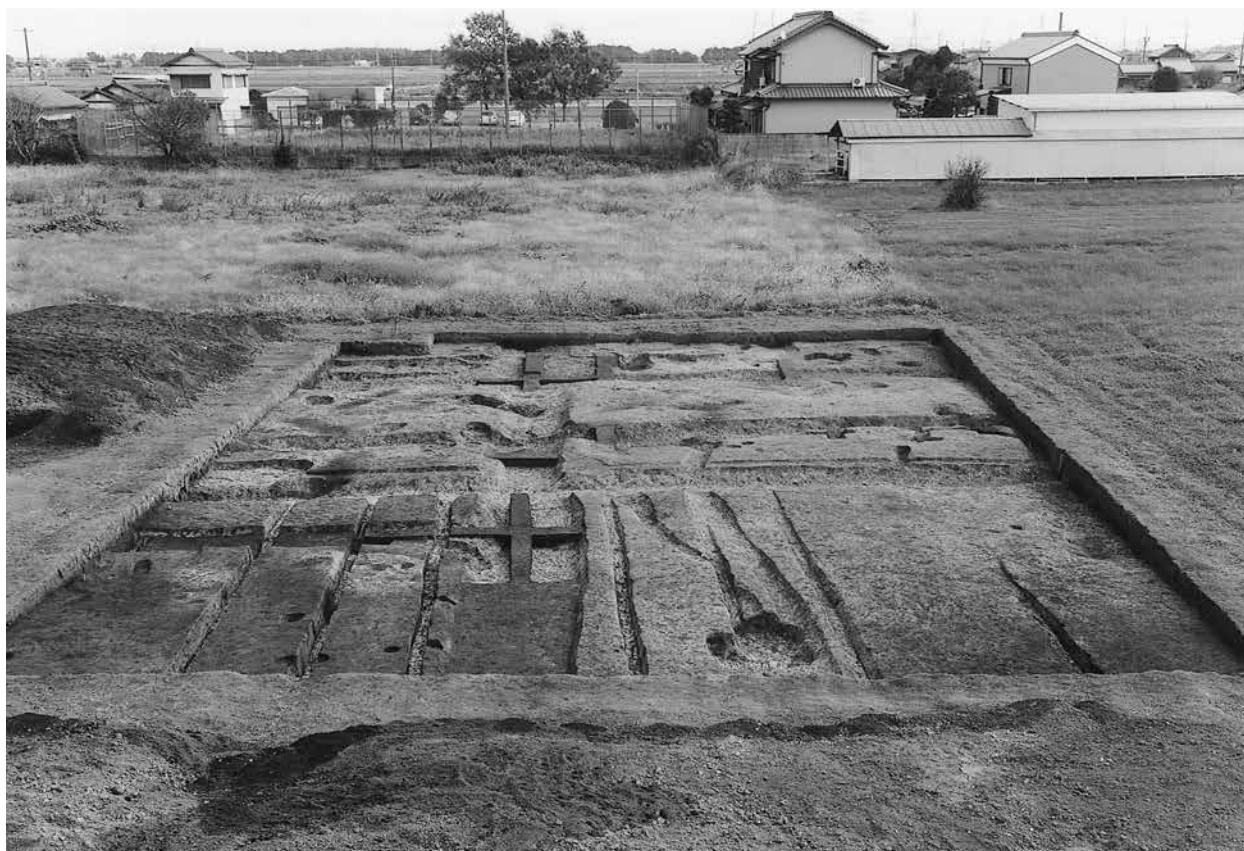
北区 S D 9615・1935・1936（北から）



北区 S K 1938、S D 1943（北から）



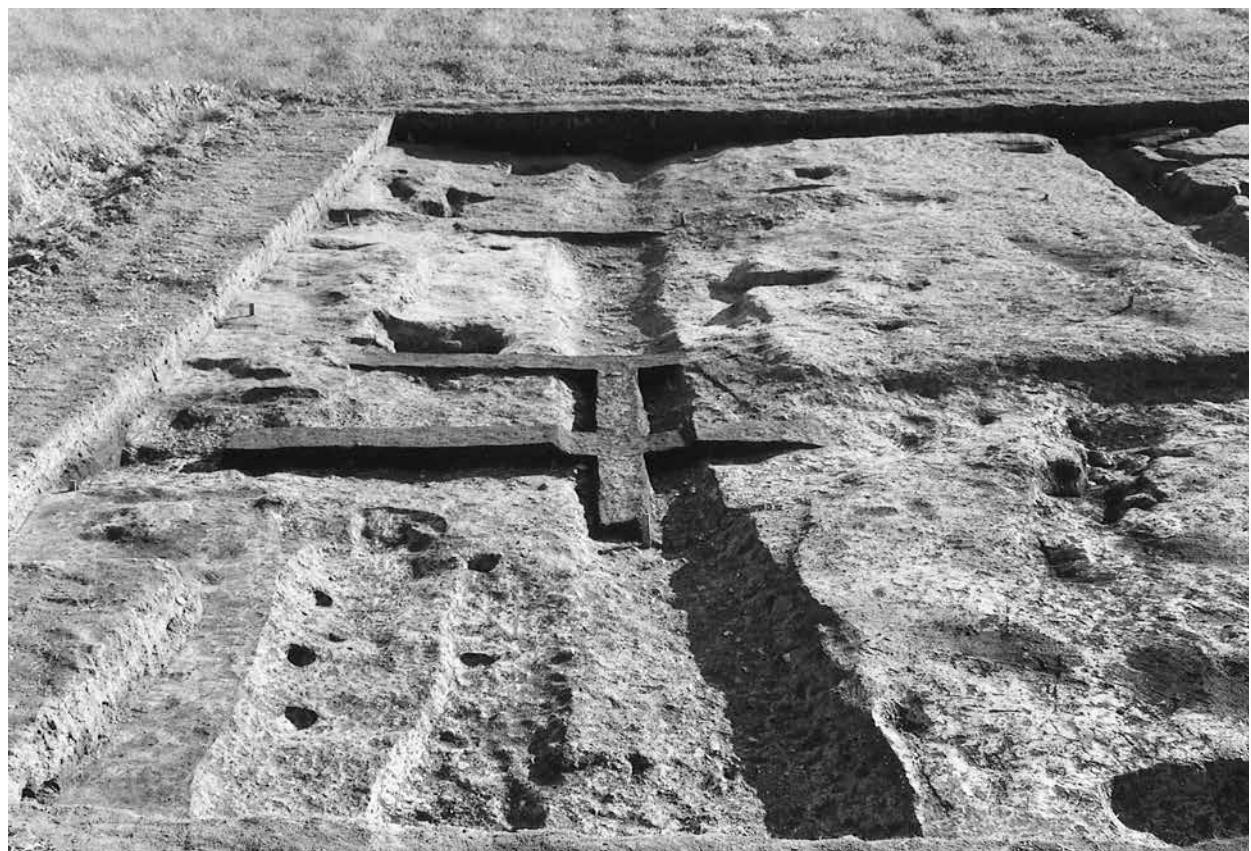
南区全景（北から）



南区全景（西から）



南区S D 3705・1940（北から）



南区S D 9615・1935・9626・1936・1940（北から）



南区SB 9622 検出状況（南から）



南区SB 9622（西から）



南区S D 1940（東から）



南区S D 1943（北から）

写真図版Ⅲ－7



第150次調査 出土遺物



# 報 告 書 抄 錄

---

史跡 斎宮跡  
平成 18 年度  
発掘調査概報

2007年11月

編集・発行 斎宮歴史博物館  
印刷 光出版印刷株式会社

---